調査報告課題に対しての負荷のかけ方と問題点
－作成指示書を用いて、レポート作成を支援する場合－

齋　藤　智　世

1．はじめに

静岡産業大学経営学部で開講している専門科目「公共情報システム論」では、生活に密着した公共領域の情報化の状況や暮らしの変化を扱う。座学で学んだ知識・理解を深めるため、身近な生活の情報化の様子、公共分野の情報化の実態を調査して報告する課題を設けている。

調査報告書としてレポートを書くには、3つの行為《A問題を創造する、B問題について調べる、C学習成果をまとめる》があり[1]、そこには4つの目的《①問題に対して解答する能力を養う、②問題提起する能力を養う、③取り組んだ問題に関する理解・知識・考えを深める、④学術論文やビジネス文書を書くための文章力を養う》が存在する[2]。論理的思考や問題発見・解決能力を向上すること、レポート・論文の書き方などの文章作法を身につけることは、大学の初年次教育で重要視されている[3]。本学でも、2004年度～2007年度の情報基礎演習B、2008年度～2010年度の情報処理演習Bとして、レポート・卒業論文の書き方を扱う科目が用意されていた。このようなレポートの書き方を学ぶ科目で書き方を習得するだけではなく、アカデミック・ライティングは専門科目の学習を通じた実践的な訓練も行うことが望ましい[4]とされている。

一方、大学生のレポートを書く能力の低下が指摘[5]されている。本学でも、学力の高低にかかわらず、2/3の学習者がレポートや文章を書くことに対して苦手意識を持っている現状がある[6]。2006年度～2007年度の公共情報システム論で課したレポートでは、序論・本論・結論の構成をなしていない、文体が不統一など、基本的な文章ルールを逸脱しているケースが多く見られた。豊田ら[7]が指摘する問題点同様、テーマからの逸脱、論旨の不統一、事実から離れた記述、稚拙な文章、Web等からの剽窃、誤字・脱字が存在していた。レポート作成に必要な力が不十分なままレポート作成の課題を与えられた学生には、そのギャップを埋めることは難しい。その結果、コピーで済ませたり、得られた情報をつなぎ合わせたりするだけでレポート作成の課題をクリアしようとするため、問題解決力、問題提起力、文章力の育成どころか、「取り

1）静岡産業大学経営学部『学ぶための技法 Basic Seminar』静岡産業大学経営学部、2003年、目次
2）酒井聡樹『これからレポート・卒論を書く若者のために』共立出版、2007年、p.14
3）中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて答申（案）第2章学士課程教育における方針の明確化　第3節入学者受入れの方針について」、2008年、p.18（参照2009年3月20日）http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/08103112/003.htm
4）中央教育審議会「第2章 第2節 教育課程編成・実施の方針について－学生が本気で学び，社会で通用する力を身に付けるよう，きめ細かな指導と厳格な成績評価を－」大学分科会（第71回）議事録・配付資料 ［資料4－2］（文部科学省）、2007年（参照2009年3月20日）http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/08103112/003/004.htm
5）佐渡島紗織「大学における「書くこと」の支援:早稲田大学国際教養学部における「ライティング・センター」の発足」『全国大学国語教育学会発表要旨集』（全国大学国語教育学会）、Vol. 109、2005年、pp.95-110
6）齋藤智世「公共情報システム論の授業における小設問形式を採用した学習課題の改善」『環境と経営』（静岡産業大学経営研究所、Vol.15、No.2、2009年、pp.43-57
7）豊田雄彦、奥村憲「レポート作成支援プログラムの開発とレビュー」『自由が丘産能短期大学紀要』（自由が丘産能短期大学）、Vol.39、2006年、p.97

組んだ問題に関する理解・知識・考えを深める」という目的さえも達成できなくなる。

「ライティング・センター」を設けて正規課程の外で学生の「書くこと」を個別に支援している大学もある[8)]が、本学では初年次教育「基礎ゼミナール」のクラス企画でレポートの作成指導が行われている。しかし、専門科目でレポートを課すことでも実践的な訓練の場とすることができる。授業で扱う内容を学ぶだけでなく、学生が苦手とするレポートの書き方も学べる課題を開発したいと考えた。

2008年度〜2009年度の公共情報システム論では、レポート作成が苦手な学生でも大きな負担を感じることなくレポート作成の課題に取り組めるように、レポートを作成する場合の５つの活動《①テーマを決める、②調べ方（調べる視点や内容）を決める、③調べる（情報を集める)、④情報を整理してレポートの構成を考える　⑤レポートを書く》[9)]のうち、レポート作成への障害となっている活動①、活動②、活動④を教員側がコントロールして負担の軽減を図り、③調べる（情報を集める）活動を中心にした誘導型のスモールステップを意識した小設問形式の課題を課した。小設問形式の課題は従来のレポート形式のように小テーマを自分で見つける必要がなく、何をやったらいいのかはっきりしている点で、レポートや文章を書くことに苦手意識を持つ学習者に好まれ、レポート課題に取り組むことがわかった。また、小設問形式の課題の中に広範囲の学習内容を調べることや、座学で学んだことを実社会のコンテンツで確認するような調査活動を設定すると、取り組んだ問題に関する理解・知識・考えを深めることもわかった。[10)]

8）　佐渡島紗織「大学における「書くこと」の支援:早稲田大学国際教養学部における「ライティング・センター」の発足」『全国大学国語教育学会発表要旨集』（全国大学国語教育学会)、Vol. 109、2005年、pp.193-196

9）　金田一晴彦・長谷川孝士他『三省堂中学校教科書　現代の国語１』三省堂、2006年、p.46

10）　齋藤智世「公共情報システム論の授業における小設問形式を採用した学習課題の改善」『環境と経営』（静岡産業大学経営研究所)、Vol.15、No.2、2009年、pp.43-57

しかし、小設問形式の課題だけを課していたのでは、レポート作成の活動①、活動②、活動④で培うべき能力の機会をそぎ、目的②、目的④の育成はできない。従来のレポート形式の課題「序論＋本論＋結論（＋参考文献）という三部構成で書かれた調査研究報告書」を自転車走行に例えれば、スモールステップを意識した小設問形式の課題は幼児用三輪車走行のようなものとも言える。学術的文書である従来のレポート形式の課題にも取り組ませる必要がある。そこで、2010年度から、スモールステップを意識した小設問形式の課題を３回課し、期末に従来のレポート形式の課題を課すことにした。

だが２/３の学習者がレポートや文章を書くことに対して苦手意識を持っている現状の中では、自転車走行をさせるにも補助輪のような支援が必要となると考える。目的②と目的④を達成するためには、教員側がレポートを作成する活動①〜⑤をコントロールして負担の軽減を図り、調査報告書の完成度を高める必要がある。

本研究では、教員側がレポート作成活動①〜⑤をコントロールした作業指示を与えてレポートを書かせた場合の効果や問題点を明らかにする。さらに明らかになった問題点を解決する方法を探る。

２．研究の方法

⑴　調査対象

静岡産業大学経営学部「公共情報システム論」でレポートを提出しアンケートに回答した受講者39名を調査対象とした。（一部では、2012年度前期４名のアンケート回答も利用している。）

なお、効果を検討する際の比較資料、レポート作成指示書設計時の資料として、2008年度後期「公共情報システム論」受講者44名、2010年度「情報処理演習B」受講者82名（一部の回答は77名）のアンケート回答結果を利用している。

⑵　研究手順

専門科目「公共情報システム論」において2010年度前期まで課していた「スモールステッ

プを意識した小設問形式の課題」をやめて、「小設問形式による調査報告課題」と従来のレポート形式の課題を併用して課すにあたり、レポートを書くことが苦手な受講生に対してレポート作成の４つの目的を達成するにはどのような支援をすればいいか検討し、課題指示書を作成する。課題指示書を使って従来のレポート形式の課題を課し、提出されたレポートと受講者アンケートを分析する。その結果から、課題指示書を用いて従来のレポート形式課題を行った場合の効果と問題点を検討する。さらに問題点を改善するための方策について提案する。

３．結果と考察

⑴　公共情報システム論で従来のレポート形式の課題を加えるための課題設計

まず従来のレポート形式の課題の位置づけを明らかにする。その後、2008年度「公共情報システム論」で２回行ったスモールステップを意識した小設問形式の課題設定の有効性と課題を考慮して、2010年度後期公共情報システム論でスモールステップを意識した小設問形式による調査報告課題と従来のレポート形式の課題を併用して課すための課題設計を行う。

Ⅰ）公共情報システム論で課したい従来のレポート形式の課題の位置づけ

石黒が「論文→自分で問いを立てて自分で答える文章、レポート→先生から与えられた問いに答える文章」[11] と述べるように、公共情報システム論で課す従来のレポート形式の課題では、教員がテーマを絞って提示することとする。

北尾らが、レポートは学術研究報告書であり、調査・研究をふまえた論理的な主張を行うことが重要で、書き方にも一定の約束がある[12] と述べるように、公共情報システム論で課す従来のレポート形式の課題では、レポートの書き方のルールをふまえ、根拠に基づいた論理的な主張を述べるものとする。石坂は「論文は著者の考えを調査や研究の成果として取りまとめ、他の研究者などの理解を求める文章である。（中略）レポートは、調査や研究結果を事実としてまとめた文章である。著者の見解は必須ではない。」[13] としているが、調査結果に対する筆者の見解は多少なりとも書かせたい。オリジナリティや強い主張は求めないが、客観的論理的な主張や合理的な根拠づけによる考えや感想を盛り込ませることにする。

レポートには「学習のまとめや文献要約といった学習レポート」と「学生自身が問題意識を持ち、自主的に調べた事柄を報告する研究レポート」[14] の２つのタイプがある。「はじめに」で記したように、今回課す課題ではレポートを書くための行為《Ａ問題を創造する、Ｂ問題について調べる、Ｃ学習成果をまとめる》を受講者が行うこと、受講者がレポートを書く目的《①問題に対して解答する能力を養う、②問題提起する能力を養う、③取り組んだ問題に関する理解・知識・考えを深める、④学術論文やビジネス文書を書くための文章力を養う》を達成できることを目標としている。そこでこの従来のレポート形式による課題（調査報告書）は、事実を報告するタイプに意見を言うタイプ[15] を加え、学習レポートと研究レポートの中間的な位置づけとする。ライティング教育科目ではないが、専門科目の学習を通じた実践的なレポート作成訓練の意味合いを持たせる。

Ⅱ）2010年度後期の公共情報システム論で課す課題

2008年度～2009年度に課した調査報告書（スモールステップを意識した小設問形式の

11)　石黒圭『論文・レポートの基本』日本実業出版社、2012年、p.14
12)　北尾謙治、実松克義、石川有香、早坂慶子、西納春雄、朝尾幸次郎、石川慎一郎、島谷浩、野澤和典、北尾 S. キャスリーン『広げる知の世界－大学でのまなびのレッスン』ひつじ書房、2005年、pp.128-129
13)　石坂春秋『レポート・論文・プレゼンスキルズ』くろしお出版、2003年、p.11
14)　渡邊淳子「ライティング教育に向けた指導法および教材開発」『大学教育年報』（熊本大学）、Vol.14、2011年、p.25
15)　田中共子編『よくわかる学びの技法第２版』ミネルヴァ書房、2009年、pp.37-38

課題）では、レポートを作成することが苦手な学生でもレポート課題に取り組むことができること、課題の中に広範囲の学習内容を調べることや座学で学んだことを実社会のコンテンツで確認するような調査活動を設定すると取り組んだ問題に関する理解・知識・考えを深めることができることがわかっている。一方で、従来のレポート形式に比べて小設問形式にはっきりとした学びが深くなる優位さは見られず、学習範囲の広さと課題追求の深さ、思考を促す設問のバランスを設計の段階でよく考えることが重要であることがわかっている[16)]。

そこで、スモールステップを意識した小設問形式のワークシートに手書きで回答するというスタイルは継続するが、調査報告回数を２回から３回に増やすことで１回あたりの調査範囲を狭めて負担を軽くし、スモールステップを意識した小設問形式課題で扱わなかった学習内容を従来のレポート形式の調査報告に盛り込むこととした。

A．スモールステップを意識した小設問形式の課題

調査報告にあたって、①実際のシステムを体験する、②メリット、デメリット、問題点、課題などをまとめる、③体験した感想を書くという流れで調査・報告ができるような小設問を設定する。報告書の構成を意識する負担を軽くするため、設問とその回答を手書きで記入できるワークシート形式とし、紙ベースで提出させる。調査対象や参考にした情報の出所を明らかにする訓練として、調査対象、出典、参考文献などを設問ごとに記入させる。１回の報告書で調査する範囲をせばめ、調査・報告の負担軽減を図る。

- 調査報告書１「自治体のWebページ」「図書館検索サービス」
- 調査報告書２「健康情報のWebページ」「医療情報Webページ」「遠隔医療、医療ネットワーク」
- 調査報告書３「防災情報のWebページ」「食品トレーサビリティ」

B．従来のレポート形式の課題

レポートを書く４つの目的[17)]のうち①〜③を満たすため、Aの調査報告書で扱わなかった学習内容（教育の情報化、サイバー犯罪、情報セキュリティ、個人認証と暗号の利用、個人情報の保護、リスクマネジメント）と広範囲で関わる課題となるよう、サイバー犯罪、情報セキュリティと関連がある「個人情報の漏えい、個人情報の収集、管理、保護に関する問題」を大テーマとして設定し、この大テーマのもとに自分で小テーマを決めて期末レポートを作成させる。目的④を達成するために、序論－本論－結論－参考文献というレポートの構成要件を満たす章立てをしたレポートを書かせる。

レポートはワープロソフトMicrosoft wordを使って作成し、デジタルデータとしてメール添付で提出させる。デジタルデータで提出させることで、次の学習効果を狙う。

- 脚注に出所をつける経験をさせ、引用と著作権を意識させる。
- 加除修正がしやすいメリットを生かし、誤字脱字、文末表現の統一等の校正をしっかり行わせる。
- 盗み見の可能性がありけっして安心とは言えないメール添付提出にあたって、セキュリティ対策上データファイルを共通鍵暗号方式で暗号化して送付するといいことを体験させる。
- 適切なパスワード設定の仕方とそのパスワードを安全に通信相手（教員）に知らせる体験を行い、共通鍵暗号方式の問題点（公開鍵暗号方式が必要になる理由）や情報セキュリティへの理解を深めさせる。

16)　齋藤智世「公共情報システム論の授業における小設問形式を採用した学習課題の改善」『環境と経営』（静岡産業大学経営研究所）、Vol.15、No.2、2009年、pp.43-57

17)　酒井聡樹によるレポートを書く４つの目的《①問題に対して解答する能力を養う、②問題提起する能力を養う、③取り組んだ問題に関する理解・知識・考えを深める、④学術論文やビジネス文書を書くための文章力を養う》を意味する。

・PCメールのマナーに配慮してメールを送信する体験をさせる。

⑵ 従来のレポート形式の課題を課すにあたっての支援策－レポート課題指示書の作成

2008年度後期「公共情報システム論」受講者へのアンケート回答では、レポートや文章を書くことについて、「とても得意」５％、「やや得意」27％、「やや苦手」43％、「とても苦手」25％と答えている。「とても苦手」の割合は熊本大学の文章を書くことへの苦手感調査で「やや苦手」33.1％（ただし選択肢が５択で「普通」32.6％が存在する）「とても苦手である」24.7％[18] と似た値である。2010年度後期の公共情報システム論受講者について、７割弱に苦手意識があり、１/４は強い苦手感を持っていると予測できる。このレポートを作成することが苦手だという学生でも従来のレポート形式の課題に取り組めるようにするために、どのような支援をすればいいか検討した。

Ⅰ）レポート作成支援方法の検討

レポート作成支援の方法として、次のような方法が考えられる。

A．レポート作成に関する書籍やwebページを紹介する、あるいは関連サイトへのリンクを用意する

B．数ページの「レポート作成の手引き」資料[19] を作成し、配布する

C．電子テキスト[20] を作成しweb上に置く

D．レポート作成前にアウトライン[21] を書かせて提出し、添削指導の後でレポート作成をさせる

E．レポート作成ワークシート[22] を配布し、記入、提出を求める

F．見本レポート、模範レポートを学生に公開し、参考にさせる

G．レポート作成に当たっての注意事項、作業手順等を詳しく書いた作成要領[23] [24] を配布する

Bタイプについては、三重大学のように45ページに及ぶ資料を作成[25] し、全学学生に配布しているところもある。本学では2007年度まで小冊子「学ぶための技法」[26] を学生に配布し、レポート作成の自学テキストとして使わせていた。現在は「SSUガイド」でレポートの提出方法やレポート・論文の作成に関する注意事項の記載にとどまっている。

A～Cタイプの方法では、一般的なレポートの書き方説明にとどまり、レポート作成の５活動《①テーマを決める、②調べ方（調べる視点や内容）を決める、③調べる（情報を集める）、④情報を整理してレポートの構成を考える　⑤レポートを書く》を教員側でコントロールして苦手意識を持つ受講者への積極的支援にするには弱い。

Dタイプが効果を上げることは先進事例[21] で明らかになっているが、公共情報システム論はアカデミック・ライティングを学ぶ科目ではなく専門科目であり、従来のレポート形式の課題は期末レポートで評価の対象となる。レポートで扱うテーマの学習時期を考慮する

18) 渡邊淳子「ライティング教育に向けた指導法および教材開発」『大学教育年報』（熊本大学）、Vol.14、2011年、p.30

19) 豊田雄彦、奥村憲「レポート作成支援プログラムの開発とレビュー」『自由が丘産能短期大学紀要』（自由が丘産能短期大学）、Vol.39、2006年、pp.95-110、pp.105-108「これでできる！レポートの書き方」

20) 三重大学情報リテラシー担当「レポートの書き方入門講習会（平成22年度）」 http://miuse.mie-u.ac.jp/bitstream/10076/11185/1/report_text2010.pdf（参照2012年８月31日）

21) 渡邊淳子「ライティング教育に向けた指導法および教材開発」『大学教育年報』（熊本大学）、Vol.14、2011年、p.27

22) 豊田雄彦、奥村憲「レポート作成支援プログラムの開発とレビュー」『自由が丘産能短期大学紀要』（自由が丘産能短期大学）、Vol.39、2006年、pp.109「レポート作成ワークシート」

23) 吉村清「09前期「基礎演習」と同「17•.18世紀イギリス文学」期末レポートについての報告」『琉球大学欧米文化論集』（琉球大学）、Vol.54、2010年、pp.89-109

24) 藤木剛康「日本の作文教育の問題点とライティング・センター」『研究年報』（和歌山大学経済学会）、Vol.15、2011年、pp.115-118

25) 花見槙子、鹿島恵『大学生のためのレポート作成ハンドブック』三重大学共通教育センター（国立大学法人三重大学）、2006年

26) 静岡産業大学経営学部『学ぶための技法 Basic Seminar』静岡産業大学経営学部、2003年

と冬休み前に課題を提示して期末試験期に提出させるので、１か月余の作成時間を与えて調査と報告書を作成させることになる。センテンス・アウトラインを提出させてフィードバックする時間的余裕が無い。授業内でレポート作成指導に充てる時間は30分〜１時間程度である。このような条件下で行う支援方法としてＧタイプを選択し、さらにＥやＦの要素を加えることとした。レポート作成時の注意事項だけでなくレポート作成手順や内容を教員側でコントロールしたレポート作成のための課題指示書を作成し、その指示に沿ってレポートを作成させることとした。

Ⅱ）レポート課題指示書の内容の検討

教員が指示書によって作成手順や内容をどう制御するかを検討するために、学生がレポート作成時にどのような点に困っているか、わからないと不安になっているかを把握する必要がある。そこで、アカデミック・ライティングを指導する科目2010年度「情報処理演習Ｂ」受講者の受講開始時アンケートと2008年度後期「公共情報システム論」受講者の受講終了時アンケートを手掛かりにレポート課題指示書に盛り込む内容を検討することとした。

「情報処理演習B」受講者は、レポートや文章を書くことについて、「とても得意」1.0％、「やや得意」25.0％、「やや苦手」57.0％、「とても苦手」17.0％と感じている。レポート作成演習を行う科目を受講希望することから、2008年度後期「公共情報システム論」の受講者に比べて「やや苦手」が多く「とても苦手」は少なくなっている。

2010年度「情報処理演習B」受講開始時アンケート「レポートを書く時に、困っていることやわからないと思っていること」の自由回答をレポート作成のための５活動[27]の視点で分類し、どの活動がレポート作成時の障害となると意識しているのかを洗い出して、回答者の割合を項目別に分類した（表１）。

表１　困っていること、わからないこと（自由回答を項目別に分類したもの）

①テーマを決める	テーマの決定	4.2%	
②調べ方（調べる視点や内容）を決める	（該当回答なし）	−	
③調べる（情報を集める）	文献調査	1.1%	
④情報を整理してレポートの構成を考える	レポートの構想を練る	18.9%	２位
	図表の作成	1.1%	
⑤レポートを書く	序論「はじめに」の執筆	9.5%	４位
	本論「研究方法」の執筆	1.1%	
	本論「結果」の執筆	1.1%	
	本論「考察」の執筆	2.1%	
	結論「おわりに」の執筆	6.3%	５位
	図表の挿入、数式の挿入	1.1%	
	引用の明記	2.1%	
	文を書く、表現	23.2%	１位
	日本語の表記	6.3%	５位
	書き方・手順	15.8%	３位
その他	パソコンの使い方	1.1%	

※「まだよくわからない」1.1%、「なし（無回答）」4.2%も存在した。

[27] 三省堂中学校教科書によるレポートを作成する場合の５つの活動《①テーマを決める、②調べ方（調べる視点や内容）を決める、③調べる（情報を集める）、④情報を整理してレポートの構成を考える　⑤レポートを書く》を意味する。

このアンケートは授業開始直後の第1週で行っており、日頃のレポート作成経験から回答したものだ。質問が「レポートを作成する」ではなく「レポートを書く」という表現だったこともあり、「文を書く、表現」23%、「構想を練る」19%、「書き方・手順」16%と、構想を練ることや文章を書くという行為にのみ視点を当てている。

文章を書くことが「とても苦手」な者は、「困っていること、わからないこと」として、「レポートをどんなふうに書いていけばいいのか分からず、いつも困っている」「何を書けばいいかわからない」「書き方や手順が分からない」「書き出しをどうしたらいいかわからない」「まったく全てわからない。[はじめに]と書くのも初めて知った」「どのように書き進めていけばいいかわからない」「文章の展開の仕方や順序」「本論の書き方が分からない」「まとめ方」「書いているときに、自分が何を主張したらいいのかわからなくなる」と回答している。文章表現、レポートの構成、序論や結論の書き方などに不安を抱いているだけでなく、どう書けばいいかレポート作成全体に関して戸惑う状況であることがわかる。

2008年度後期「公共情報システム論」受講者の受講終了時アンケートで、「誘導型のスモールステップを意識した小設問形式の課題と従来のレポート形式の課題のどちらを中間や期末の課題として望むか」の質問に対して66%が小設問形式の課題を望んでいた。特にレポートや書くことに強い苦手意識を持つ受講者の8割は小設問形式の課題を望んでいた。小設問形式の課題を望む理由（表2）を見てみると、小設問形式は従来のレポート形式のように小テーマを自分で見つける必要がなく，何をやったらいいのかはっきりしている点でレポートや文章を書くことに苦手意識を持つ学習者に好まれていた。小設問形式は、レポートや書くことが苦手な学習者にとって、やることが明確で取り組みやすい課題であったと言える。また小設問形式で制御・誘導されることで学習が深まると感じていた[28]。

この分析から、従来のレポート形式の課題に取り組むには、どのような手順で何をしたらいいか明確にすることや、小テーマを見つけるための手助けをすることが必要だと考える。

以上の結果から、次の点に考慮して、レポート課題指示書を作成することにした。

- 調査活動でやることを明確にし、課題に取り組みやすくする
- レポートの書き方、手順を示す
- 文章を書く際に参考となるような表現例を示す（特に序論と結論）

表2　小設問形式を望む理由

やることが明確で取り組みやすい	・「何をやったらいいのか明確にしてくれたほうがやりやすい」 ・「設問がはっきりしていて、わかりやすい」 ・「レポート2,000字とかのレポートより、書いていることが分かっているのでよい」 ・「どこから手をつけて良いのかわからなかったりするので、簡単な質問から深い質問へという今のやり方が良いと思う」 ・「もとめる内容がはっきりしているので分かりやすいし、やりやすい」
小テーマを見つけるというハードルがない	・「（自分で小テーマを見つけるのは）テーマが漠然としていて、絞り込みができづらい」 ・「（従来のレポート形式では）小テーマを見つけるまでに時間がかかる」 ・「（従来のレポート形式では）テーマを見つけられない」 ・「テーマが決まっているので、調べやすい」

28) 齋藤智世「公共情報システム論の授業における小設問形式を採用した学習課題の改善」『環境と経営』（静岡産業大学経営研究所）、Vol.15、No.2、2009年、pp.43-57

さらに、アカデミック・ライティングを学ぶ科目「情報処理演習B」で行ったレポート作成活動を、専門科目「公共情報システム論」で行うには何をどう支援して負担を軽くしたらいいか検討し、次のような支援を行うこととした（表３）。

表３の支援に加えて、レポート課題を課す４つの目的《①問題に対して解答する能力を養う、②問題提起する能力を養う、③取り組んだ問題に関する理解・知識・考えを深める、④学術論文やビジネス文書を書くための文章力を養う》も考慮して、レポート作成の５つの活動でどう負担を減らすか検討する必要がある。そこで、５つの活動での支援として次のような手立てをとったレポート課題指示書を作成することにした。

活動①テーマを決める

ライティング教育科目である情報処理演習Ｂでは、シンキングツールとしてマッピング（マインドマップ）と九分法（マンダラート）を使うことで「健康」という大テーマから各自が小テーマを考えている。しかし、公共情報システム論で課すものは論文でなくレポートであり、教員がテーマを絞り込めばよい。課題の大テーマを広範囲「個人情報」ではなく、ある程度範囲を狭めた「個人情報の漏えい、個人情報の収集、管理、保護に関する問題」にする。この大テーマのもとに、自分で小テーマを決めて、レポートを作成する。

小テーマを見つけるハードルを低くするために、「与えられた問いに答える」[30] という要素を入れて「１つの事件や事例、問題を取り上げて、詳しく調査し、その結果を報告する形が望ましい。」という一文も加えた。小テーマを決定する際に参考となる資料へのアクセスをスムーズにするためのリンク集を用意する。

表３　情報処理演習Ｂと公共情報システム論とでのレポート作成活動の比較

	情報処理演習Bでの活動	公共情報システム論での活動
テーマの指定	「健康」という大テーマのもとに、小テーマを自分で考えさせる。	「個人情報の保護」という大テーマではなく、もう少し範囲を狭めた「個人情報の漏えい、個人情報の収集、管理、保護に関する問題」という中テーマを設定し、どのような事例を詳細に調査するか（小テーマ）は各自に考えさせる。
テーマの選定への手助け	シンキングツールとして、マッピング（マインドマップ）、九分法（マンダラート）を使い、テーマ選択への手立てとした。	授業用のwebサイトに、テーマ選択に関連する情報を掲載しているwebサイトのリンク集を用意する。
調査方法	アンケート調査、文献調査インターネット上のWebページ、書籍、その他の文献情報	文献調査インターネット上のWebページ、書籍、授業で配布した資料、その他の文献情報
構想を練るための手立て	用語の定義、問い、予想する答え、実際の答えをワークシートに書いて、方向性を検討する。序論折り紙[29] を使ってレポートの骨格を考える作業を行い、序論作成の手掛かりとする。	レポートの章の数と章タイトルを指定する。一部の章では節の数と節タイトルを指定する。各章や節で盛り込むべき情報をレポート作成指示書で指定する。

29)　酒井聡樹『これからレポート・卒論を書く若者のために』共立出版、2007年、pp.81-91

30)　石黒圭『論文・レポートの基本』日本実業出版社、2012年、p.14

活動②調べ方（調べる視点や内容）を決める

情報処理演習Bでは、調べ方（調べる視点や内容）を決めるために、ワークシートを使って用語の定義する、問いと予想する答えを考える、レポートの骨格を考える等の作業を行っている。序論折り紙[29]によって序論で書くことの内容を検討している。この作業をレポート課題指示書提示のみで支援をするのは難しい。公共情報システム論では、構想を練るための手立てを支援するためにレポートの章、節を指定し、各章で盛り込むべき情報をレポート作成指示書で指定した。序論「はじめに」の中に盛り込む内容を７つ指定し、スモールステップを意識して簡単な質問から深い質問へと調べる視点を示す。

①「個人情報」」とは何か。（定義や種類に関すること）
②企業がどのような個人情報を収集しているか。
③なぜ企業は個人情報を収集するか。
④なぜ個人情報を保護する必要があるのか。
⑤現在の日本で、個人情報の収集・管理・保護に関して、どのような問題点があるか。
⑥自分が今回取り上げる事件（または問題）は何か。
⑦なぜその事件（または問題）を取り上げようと思ったか。

本論「結果」の中に盛り込む内容を4つの節として指定し、報告する内容の視点を示す。

⑴　事件（または問題）の概要
⑵　事件（または問題）が起こった背景、理由、原因
⑶　事件（または問題）の影響
⑷　事件（または問題）解決のための方策、対策、（事件後の処理、再発防止策等）

活動③調べる（情報を集める）

インターネット上での調査活動を中心とした「スモールステップを意識した小設問形式の課題」を３回行っているので、「個人情報」を扱う授業で用意する資料やリンク集以外の指示書での作成支援は行わない。

活動④情報を整理してレポートの構成を考える

レポートの章と節を教員側が指定し、章節のタイトル、各章、各節で書く内容を指定する。

１．はじめに　　２．調査の方法　　３．結果（４つの節のタイトルは前述のとおり）
４．考察　　５．おわりに　<参考文献>

活動⑤レポートを書く

各章で何を書くかを示す。特に「はじめに」の内容は活動②で記したように詳細にし、「おわりに」では簡単な書き方例を加える。

引用の仕方、出所情報の書き方、脚注参照の作業手順、レポートに図表を入れる場合の付属情報の書き方、参考文献の書き方についての説明を書く。

レポート完成後の推敲・校正時の手掛かりとなるように、参考文献の有無、記載漏れや文体や誤字脱字などのチェック項目を設ける。

※その他、共通鍵暗号方式を使ってファイルを暗号化する方法も示す。

⑶　提出されたレポートの分析

2010年度後期にレポート課題指示書に沿って従来のレポート形式の調査報告を作成する課題を課した。その提出されたレポートを評価項目に沿って評価した。指示書で指示された内容の盛り込み具合、レポートの分量（文字数）、他者の著作物の利用状況などの視点で分析した。また受講者Webアンケートの結果から負担感を調べ、2008年度の公共情報システム論のアンケート結果と2010年度の情報処理演習Ｂのアンケート結果を比較した。それらの結果から、レポート作成指示書によって負担軽減を図った場合の効果や問題点を探った。

Ｉ）レポートの評価

レポートの評価は、調査活動の充実度、指定した内容がレポートに盛り込めているか、情報の要約の度合い、意見・考えの記述、誤字脱字、文体などに、内容の充実度、論理性などを加味した総合評価で判定し、絶対評価で80％以上をＡ、70～80％をＢ、60～70％を

図１　2010年度後期公共情報システム論受講者で苦手意識のある学習者のレポート評価

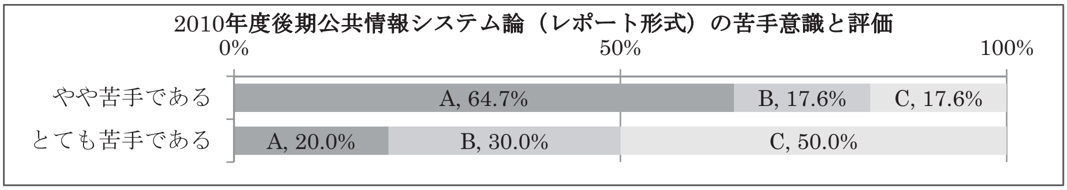
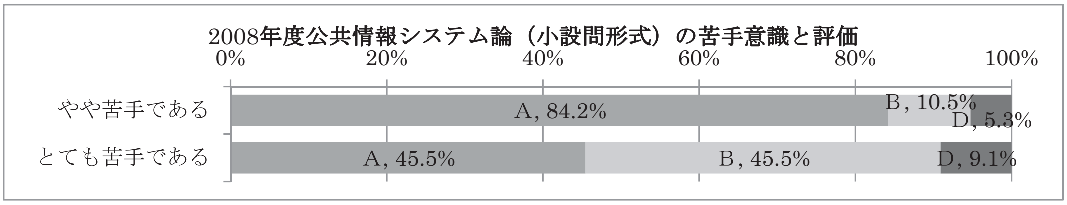


図２　2008年度公共情報システム論（小設問形式だった時）受講者で苦手意識のある学習者のレポート評価



Ｃと、60％以下をＤとした（レポートのみの評価であり、科目の評価とは異なる）。評価にあたって、戸田山の論文の評価基準[31]や田町のレポート添削のチェックポイント[32]、吉原らのセルフチェックポイント[33]のような細かな評価基準が必要と考え、レポート課題指示書の指示に従って書いているかどうかを32項目（そのうちレポートの記述内容に関するものは23項目）のチェックポイントを用意して、できているかどうか４段階でチェックした。また、各章の分量（文字数）と引用扱いではない不当なコピー＆ペースト（略称コピペ）の分量を調査した。

その結果、Ａは48.7％、Ｂは28.2％、Ｃは20.5％、Ｄは2.6％となった。2008年度の公共情報システム論で従来のレポート形式の課題を課した時のレポート評価がＡ33％、Ｂ32％、Ｃ17％、Ｄ19％だったことと比較すると、Ａが約15％増え、Ｄが15％減っている。Ｂは減少しているがＣは増加し、レポート課題指示書によるレポート作成支援の効果があったと考えられる。

一方、必要な情報が入っていない、報告内容が少ない、論理が通っていないというポイントで評価を下げたレポート、自分の言葉で書いていないレポートも存在した。

レポート評価と文章を書くことについての苦手意識のクロス集計を行った。文章を書くことの苦手意識は「とても得意」０％、「やや得意」25.7％、「やや苦手」48.6％、「とても苦手」25.7％と、2008年度後期の受講者とほぼ同じ割合である。やはり受講者の７割以上が苦手意識を持ち、１/４は強い苦手意識を持っている。

文章を書くことの苦手な受講者の成績を見てみる（図１）。「やや苦手」な受講者の２/３はA評価を得ている。しかし、「とても苦手」な受講者は、１/２がC評価にとどまっている。

スモールステップを意識した小設問形式の課題を課した2008年度（図２）と比べてみると、課題指示書による作成支援をした場合でも、従来のレポート形式の課題では小設問形式の課題ほどは苦手意識の強い受講者への強力なサポートにはならなかったと言える。

テーマや調査方法、評価の基準はまったく違うが、アカデミック・ライティングを学ぶ科目「情報処理演習Ｂ」の受講者（図３）と比較してみる。

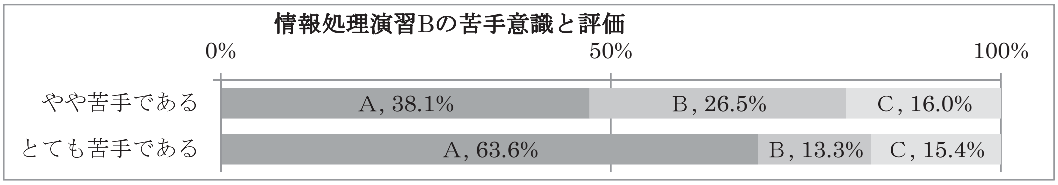
「情報処理演習Ｂ」では、書くことへの苦手意識とレポートの評価は連動していない。「とても苦手」な受講者でもＡ評価が63.6％

31)　戸田山和久著『論文の教室』日本放送出版協会、2002年

32)　田町典子「レポート添削指導に関する事例報告」『經營と經濟:長崎工業經營専門學校大東亞經濟研究所年報』（長崎大学）、Vol.87、No.1、2007年、pp.116

33)　吉原恵子・間渕泰尚・冨江英俊、小針誠『スタディスキルズ・トレーニング』実教出版、2011年、p.95

図３　2010年度情報処理演習Ｂで苦手意識のある学習者のレポート評価



となり、苦手意識があってもC評価は16%程度に収まっている。課題指示書によるレポート作成支援は、苦手意識が強い受講者支援にとっては十分な働きをしたとは言えない。一方「やや苦手」な受講者では、「情報処理演習Ｂ」よりも「公共情報システム論」のほうがA評価割合は２倍以上増えている。苦手意識が弱い受講者にとって課題指示書は有効に働き、良いレポート作成ができたと言える。

2010年度後期受講生ではないが、2012年度「公共情報システム論」受講生へのアンケート「レポート作成指示書で章や節を指定し、書く内容を細かく指定することは書きやすさにつながったと思うか」では、「とても書きやすかった」50%、「やや書きやすかった」25%、「やや書きにくかった」25%、「とても書きにくかった」０%という回答だった。レポート課題指示書について「順を追って書くことができた」「まとめる際に重宝した」「まったくの白紙の状態からレポートを書くのは非常に大変なので、骨組みを指示されているレポートは非常に書きやすい」というメリットと、「章や節がありすぎてわかりづらい」というデメリットを感じていた。メリットを感じている受講者は「書き方に迷った時、指示書があると迷わずに作成できる」「レポートを書くのが得意になる」という理由で全員レポート課題指示書の存在を望んでいた。デメリットを感じていた受講者は「必要な人だけ指示通りに書けばよい」と述べ、レポート課題指示書があっても無くてもかまわないと回答していた。

Ⅱ）レポートの構成

序論＋本論＋結論の構成でレポートを作成するため、表紙、１～５章（第３章は⑴～⑷の４節で構成）、参考文献という章立てを指示した。その結果、表紙、１章～５章、２章の１節～４節、参考文献がすべての章節が記載されているレポートは60.5%であった。表紙、１章～５章、参考文献は記載されているが、２章に節が無いものが28.9%、２章は節番号だけで小見出しが無いものが7.9%あった。「表紙」が無い5.3%、「おわりに」が無い15.8%、参考文献が無い15.8%と、一部の章が欠けていたレポートがあった。章節に関する記載が無く、すべての文章が１つのまとまり（形式段落はある）で表現されているレポートが7.9%あった。

今回は、「序論＋本論＋結論（＋参考文献）という三部構成で書かれた調査報告書」作成を目標とした。「2,000字以内ぐらいのごく短いレポートでは章立て不要の場合も多い。長くなると必要。」[34] と言う意見もあるが、ここでは章立てを要求しているため、レポート完成後に行う提出前セルフチェック項目に「□１～５章と参考文献が書いてある」という項目を入れておいた。しかし、１～５章と参考文献という構成のレポートは79.5%にとどまった。

Ⅲ）指示した内容のレポートへの盛り込み具合

レポートの文章産出を支援するために、各章で書く内容を課題指示書に記した。指示した内容がレポートに盛り込まれているかどうか調べた（表４）

34)　江口聡「レポートの書き方」http://melisande.cs.kyoto-wu.ac.jp/eguchi/memo/report.html（参照2012年８月30日）

表４　課題指示書で指示した内容の記載の有無

章	課題指示書に指示されていた記入内容	記載有り	記載に問題あり	記載なし
はじめに	「個人情報」とは何か（定義や種類に関すること）	81.6%	18.4%	0%
	企業がどのような個人情報を収集しているか	71.1%	7.9%	21.1%
	なぜ企業は個人情報を収集するか	78.9%	13.1%	7.9%
	なぜ個人情報を保護する必要があるのか	73.7%	21.1%	5.3%
	現在の日本で、個人情報の収集・管理・保護に関して、どのような問題点があるか	78.9%	15.8%	5.3%
	自分が今回取り上げる事件（または問題）は何か	65.8%	18.4%	15.8%
	なぜその事件（または問題）を取り上げようと思ったか	73.7%	10.5%	15.8%
調査方法	いつ	47.4%	5.3%	47.4%
	どのような方法で	78.9%	10.5%	10.5%
	どのような調査をしたか	44.7%	7.9%	47.4%
結果	事件（または問題）の概要	84.2%	7.9%	7.9%
	事件（または問題）が起こった背景、理由、原因	78.9%	10.5%	5.3%
	事件（または問題）の影響	76.3%	23.7%	5.3%
	事件（または問題）解決のための方策、対策、（事件後の処理、再発防止策等）	76.3%	18.4%	5.3%
考察	調査結果からどのようなことがわかったか	73.7%	21.1%	5.3%
	個人情報の公開、保護、企業・組織の管理についての自分の考え	71.1%	15.8%	13.2%
おわりに	この研究の全体を要約する	73.7%	19.2%	5.3%
	積み残した問題や今後の課題を書く	78.9%	10.5%	10.5%
参考文献	書いたことの裏付けとなる資料がある場合は、脚注に記載すること	57.9%	0%	42.1%

課題指示書で記載を指示した内容のレポートへの記載率は平均70.3％であった。記載はしても一部に難があったものも平均15.3％あった。問題ない記載率が５割を下回っているものは、調査方法の「いつ」「どのような調査をしたか」、参考文献の「文献リストを書く」であった。序論の冒頭で指示した個人情報の定義こそ全員記載したが、それ以外は指示していても記載していないレポートがあった。不記載率は平均14.4％で、不記載率が４割以上になったものは、調査方法「いつ」「どのような調査」各47.4％、引用しているにもかかわらず「脚注参照が無い」42.1％であった。

図や表を記載したレポートが１件あったが、その図と表は他資料から前後の文章も含めて丸ごとコピペしたもので、図表番号や図タイトル、資料・出所・注などの付属情報がつけてなかった（表タイトルは元データにあったため記載されていた）。

課題指示書には、レポート提出前セルフチェック項目に句読点や誤字脱字チェックと一緒に、「□「である」体の文章で書いてあり、「です・ます」体や話し言葉が混ざっていない」という項目を入れておいた。しかし、文体を常体に統一できていたレポートは76.3％、常体と敬体の混合が23.7％あった。調べたことは常体で書いて自分の意見・考えになると敬体になってしまう事例と、コピペしてコピー元の文体をそのまま残している事例の２種類があった。ワープロソフトを利用しているのだから加除修正は簡単にできるはずだが、レポート作成後の校正をしっかり行っていなかったと推測される。

Ⅳ）レポートの分量

課題指示書によって各章で書くべき内容を

図４　表紙を除くレポートの文字数のヒストグラム

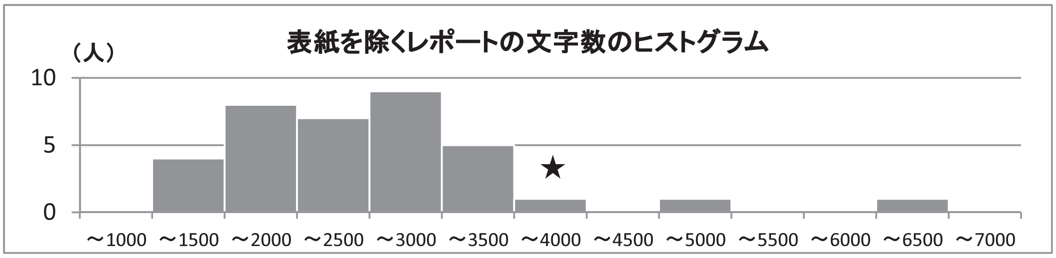


表５　レポートの分量（文字数）に関する統計情報　注）参考文献は件数

	全体	はじめに	調査方法	結果	考察	おわりに	参考文献
平均	2,448.1	944.4	61.1	722.0	406.8	301.1	3.3
標準誤差	152.9	92.8	6.2	53.1	38.0	33.2	0.3
中央値（メジアン）	2,351	857	59.5	710	338	268.5	3
最頻値（MO）	2,709.3	786.7	66.7	701.0	345.4	251.0	3.2
標準偏差	955.1	557.0	36.0	318.5	227.9	193.4	2.0
尖度	4.4	12.0	0.2	0.1	0.8	13.0	1.6
歪度	1.6	2.9	0.9	0.7	1.0	3.0	1.4
範囲	4,903	3,149	134	1,200	895	1,107	8
最小	1,107	342	15	250	133	80	1
最大	6,010	3,491	149	1,450	1,028	1,187	9
標本数	39	36	34	36	36	34	37

［注意］最頻値は、標本群で最も頻繁に出現する値では一部の章で結果が得られなかったこと、分布が左右対称ではなくピークが左にあることから、比例分割方式≪最大度数を持つ階級の下端をX'、１つ下の階級の度数をf-1、１つ上の階級の度数を f+1、階級の幅をCとして、最頻値MOを、MO=X'+C*f+1/(f-1+f+1) ≫で計算している。

指示したが、文字数については上限も下限も目安も設けなかった。今回は作成するレポートの文字数指定をしなかったのだから、学術的な文書としてきちんと成立していて課題指示書で指示した内容が適切に盛り込まれていれば字数の多少は問題とはしない。しかし、課題指示書の中で文字数について触れていないことで不適切なレポートが存在しないかどうかを検討した。

表紙を除くレポート本体の部分の全体文字数と各章の文字数と参考文献件数を調べ、ヒストグラム（図４）と統計情報（表５）を求めた。（章が作っていないレポート３つは全体の集計には含めたが、各章の集計から除外した。章の一部が無いレポートはその章を０ではなく空白としている。）なお、ヒストグラムでは、もっとも完成度が高いと評価したレポートが所属する階級に★マークをつけている。

今回平均が2,248字、中央値2,351字、最頻値2,709.3字となった。400字詰め原稿用紙６枚、Ａ４用紙１枚1,200字で２枚という分量に該当する。よくある大学のレポートの指定文字数（2,000～3,000字）や、国際バカロレアの「知識の理論（TOK）」で要求する課題エッセイ分量[35]（英語で1,200～1,600語。日本語はその２倍の文字数と考えると2,400～3,200字）に近い値となっている。吉原ら[36]のレポート全体の文字数と盛り込む内容の表

35）　文部科学省「国際バカロレア・ディプロマプログラム　Theory of Knowledge（TOK）について」http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2012/09/06/1325261_2.pdf（参照2012年9月8日）

36）　吉原恵子・間渕泰尚・冨江英俊、小針誠『スタディスキルズ・トレーニング』実教出版、2011年、p.89

と今回の課題指示書で指示した内容を照らし合わせて見ると、今回盛り込むよう指示した内容は4,000字程度のレポートに「あったほうがいいもの」に相当する内容を多く含んでいる。資料の直接引用や考察していく方法に該当する文字数分を減らしても、3,500字程度を要求していることになる。それに比べると、中央値、最頻値が2,500字前後となった今回は、全般的に文字数が少なかったと考えられる。なお、今回提出されたレポートの中でもっとも完成度が高いと評価したレポートは表紙を含めて3,700字だった。文字数が4,500字を超えるレポートが5.1%、1,500字以下のレポートが12.8%あった。最小文字数と最大文字数との間には5,000字近い開きがある。

レポート全体も、各章も平均と中央値と最頻値が一致しない。歪度がいずれも+0.7以上であり、データのピークが左に傾いていることがわかる。尖度と歪度がともに＋１以内である「調査方法」「結果」「考察」はおおむね正規分布とみなすことができるが、標準偏差が平均の１/３〜２/３の値となり、ばらつきが大きいことがわかる。中央値と平均の文字数の差を表６に表す。

いずれも中央値は平均を下回っており、「はじめに」「考察」「おわりに」では９割を下回る。

「全体」の尖度は4.4で、「はじめに」「おわりに」の尖度が10を超え、歪度が３に近い。外れ値があると想定できる。

そこで、問題がある章の文字数のヒストグラムを図５〜図７で示す。

表６　レポート文字数における中央値と平均値の差

計算方式	全体	はじめに	研究方法	結果	考察	おわりに
中央値－平均	－97.1字	－87.4字	－1.6字	－12.0字	－68.8字	－32.6字
中央値／平均	96.0%	90.7%	97.4%	98.3%	83.1%	89.2%

図５　「はじめに」の文字数　ヒストグラム

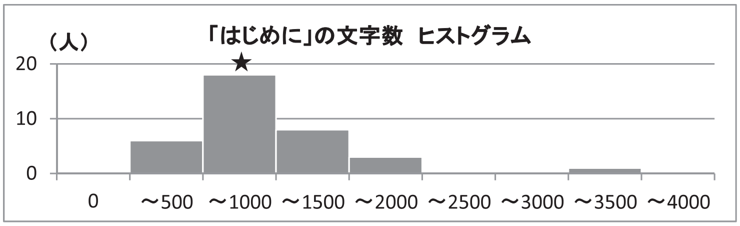


図６　「考察」の文字数　ヒストグラム

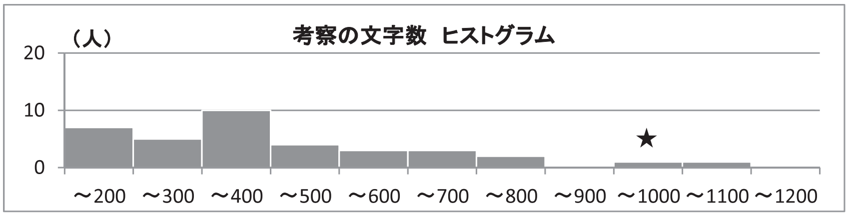


図７　「おわりに」の文字数　ヒストグラム

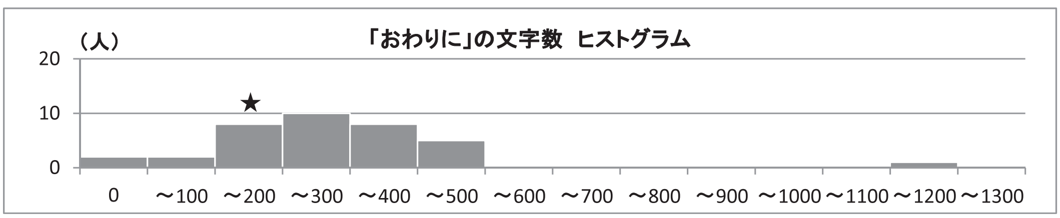


図４〜図７を見ると、レポート全体では6,010字と4,765字のレポートが異常データと見なされ、3,491字の「はじめに」、1187字の「おわりに」も異常データと見なされた。「考察」では1,028字と976字のレポートが他とは離れた位置にあった。

「はじめに」3,491字のレポートは、全体6,010字のレポートと同一のものであり、「はじめに」の内容の82.9%が他資料からコピペしたもので成り立った問題のあるレポートだった。

「考察」1,028字のレポートは、全体6,010字のレポートと同一のものであり、「考察」の内容の84.9%が他資料からコピペしたもので成り立った問題のあるレポートだった。「考察」976字のレポートは、指示した「調査結果からどのようなことがわかったか」の内容として調査した個人情報漏えい事件の問題点について小見出しをつけて３つにまとめて記載していた部分617字と、「個人情報の公開、保護、企業・組織の管理についての自分の考え」332字からできていた。完成度が高いため字数が増えていたのであり、問題が無いレポートである。

「おわりに」1,187字のレポートは全体4,765字のレポートと同一のものであった。このレポートの筆者は、今後ネットショップ開業を考えていることから、個人情報保護について今後注意すべき点を３つに分けて「おわりに」に入れていた。この部分は「おわりに」の52.9%を占めている。「おわりに」で求めた内容（研究の要約、積み残した課題、今後の課題）に関係してはいるが、本来考察で述べる内容でもある。この部分を除いた文字数は559文字となり、他の回答者の上位層である401-500字の階級に含まれるようになる。また「おわりに」から除いた628字を「考察」に入れたと考えると「考察」は1,251字となるが、内容的には妥当なレポートだと判断できる。

異常なコピペ量だった6,010字のレポートは異常データで、4,765字のレポートが今回の課題指示書によって作成したレポートのもっとも多い文字数のレポートと考えられる。

一方、文字数の少ないレポートを見てみると、外れ値と思われるものはない。もっとも文字数が少ないレポートは1,107字であった。このレポートに問題点があるかどうか探ってみたところ、どの章の文字数もその章の最小値は上回っていた。473字の「はじめに」で要求した内容に欠けているものはなかった。企業が収集する個人情報や収集理由が88字にまとまっている。取り上げる問題（ホームページからの個人情報漏えい）と取り上げる理由が73字であった。19字の「調査の方法」では、いつどんな内容の調査を行うかの２つの視点が欠けていた。278字の「結果」では節立てができていなかった。だが、４段落には分けており、それぞれの段落の冒頭には節タイトルに相当する言葉が入っており、簡潔ではあるが指示した内容は盛り込まれていた。ただ、具体的事例や根拠となる情報が盛り込まれていなかった。160字の「おわりに」に今後の課題こそなかったが、169字の「考察」も含めて、指示した内容は盛り込んでいた。しかし、根拠に基づいた意見ではなく抽象的で簡潔な記述で終わっていた。「参考文献」は２件挙げていたがURLのみでそれ以外の出所情報が記載されていなかった。文字数は少なくても、課題指示書で指示した内容を大幅に欠いているわけではない。しかし、吉原らの1,000字程度レポートでも必ず入れるべきだとしている「主張を裏付ける最も重要な根拠（資料）を盛り込む」[37]ということができていない。

「主張を裏付ける最も重要な根拠（資料）を盛り込む」ということを参考文献数のヒストグラム（図８）で見てみると、ピークが左に偏っており、４件以上では度数が極端に少なくなる。３件が最も多く、全体の37.8%を占めた。４件以上を記載したレポートは21.6%で、８割のレポートが３件以下であった。参考文献数が１件でも評価はA、B、Cが存在した。しかし、４件以上参考文献を挙げていた場合では、異常データと見なした6,010字のレポートを除き、評価Aが88.8%、Bが

37)　吉原恵子・間渕泰尚他「スタディスキルズ・トレーニング」実教出版、2011年、p.89

図８　「参考文献」の件数　ヒストグラム

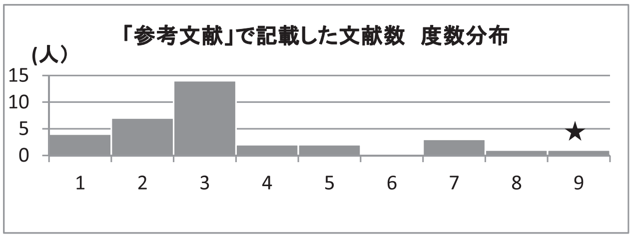


表７　異常データと判断した6,010字のレポートを除いて計算した、レポートの文字数統計情報

	全体	はじめに	調査方法	結果	考察	おわりに	参考文献
平均	2,354.3	871.7	62.2	714.8	389.1	299.0	3.2
中央値	2,344	853	62	703	338	257	3
最頻値	2,626.0	866.4	66.7	691.9	345.4	247.7	3.2
標準偏差	764.8	351.0	35.8	320.1	204.5	196.1	1.9
尖度	1.2	0.2	0.2	0.2	0.6	12.9	2.4
歪度	0.7	0.7	0.8	0.7	0.9	3.0	1.6
最小	1,107	342	15	250	133	80	1
最大	4,765	1,692	149	1,450	976	1,187	9
標本数	38	35	33	35	35	33	36

11％と評価の高いレポートを作成していた。参考文献を最多の９件挙げたレポートは完成度が高く、そのレポートの作者はレポートと一緒に新聞切抜き記事をPDFデータにして提出してきた。今回のレポートはメール添付で提出している。インターネット情報はURLを記載することで読み手に確認してもらうことができるがアナログ情報では読み手にすぐには伝わらない。そこで新聞記事を読み手に届けるためPDF化し確認してもらう手立てとしたと推測できる。

課題指示書でレポートを書かせる場合、その内容の質を向上させるためには、下限や上限の文字数、○○文字程度という目安を書くか、主張を裏付ける最も重要な根拠（資料）を盛り込むことを強要する必要があると考える。

以上のことから、異常データと思われる6010字のレポートを除いて、今回の課題指示書を用いて書いたレポートの統計情報は次のようになる（表７）。

課題指示書によって文字数指定をしないでレポートを書かせた場合、レポートの全体と各章の文字数（中央値）は、表紙を除いた全体で2,344字、「はじめに」853字、「調査方法」62字、「結果」703字、「考察」338字、「おわりに」257字、「参考文献」３件であった。

Ｖ）他者の著作物の利用

今回のレポートは学習レポートと研究レポートの中間的な位置づけとなる研究調査型の調査報告書であり、情報やデータを集めてその事実を整理し、事実から根拠を選び出して意見をまとめる作業を行う。課題指示書で書くように指示する内容も、他者の著作物の情報からわかったことをまとめる部分が多い。吉田は引用を自分の文章の１割以下[38]に、木下は２割以内[39]にとどめた方がよいとしているが、吉村は出所情報をつけることを条件に、レポートの８～９割は引用で構わないが１～２割は独自の見解を書くことを指導している。「１年次の前期の段階ではクリエイティブで

38)　吉田健正『学生と大学院生のためのレポート・論文の書き方［第２版］』ナカニシヤ出版、2004年、p.131

39)　木下是雄『レポートの組み立て方』筑摩書房、1994年、p107

オリジナルなレポート作成を期待するのには無理がある」として、蔓延するコピペ問題の解決の糸口として「学生に引用と盗用の区別を十分に理解させたうえで、正確な引用の手法を習得させるという意味で、引用主体のレポートになっても構わないという柔軟な態度で「基礎演習」を担当することが現実的だと考えます。」[40] という考えからだ。私も同じ考えから、引用が多くても適切な範囲なら問題にしない方向でレポートを評価した。

調査結果の章での指示には「引用する場合は、引用分量が多すぎないこと。なるべく自分で文をまとめること」と記し、「他人の文章を自分の文章のように見せかける行為を絶対にしてはならない。」というSSUガイドの表記を課題指示書に記載して、口頭説明も行った。だが、豊田・奥村が挙げた問題点[41] にあった稚拙な文章、Web等からの剽窃など、従来のレポート形式の課題の問題点がレポート課題指示書を使った今回でも見られた。

他者の著作物を利用する場合は、引用と見なす３つの条件「①引用の目的に沿い、自身の著作物が主で、引用物が従であること、②「」やレイアウトで自分の意見と他の資料を区別する、③脚注に出所をつける」をクリアする必要がある。他者の著作物を不当にコピペして利用している箇所がないかどうかチェックした。峯脇が紹介する「模倣レポート判定支援システム」[42] や高橋らの「Webサイトからの剽窃レポート発見支援システム」[43] のように自動判定するシステムを使うのではなく、レポートで記述されている文を教員の手でフレーズ検索する方法なので、一致するwebページを必ず検索できているというわけではない。

峯脇は、「コピペレポートには(1)他学生のレポートからコピペしたもの、(2)web上のテキストからのコピペの２つの傾向がみられる」としている。他の科目では(1)タイプに遭遇したこともあったが、今回の調査では(1)はなく、(2)だけだった。

不適切な形で他者の著作物を利用していたレポートは25％あった。特にコピペが目立ったレポートのリストを表８に示し、どのような状況だったのか次に述べる。

表 8　コピペが目立ったレポートの文字数とコピペした部分が占める割合

	表紙を除いた全体	はじめに	結果	考察	おわりに
A	1,425　(50.0％)	440 (100.0％)	506	308　(46.1％)	134　(97.0％)
B	1,727　(30.2％)	467　(25.3％)	901　(44.8％)	141	209
C	1,865　(24.8％)	517　(61.5％)	451	417　(34.8％)	255
D	2,015　(4.7％)	1,037　(9.2％)	423	312	197
E	2,519　(32.2％)	573	897　(55.2％)	317	461　(68.3％)
F	2,736　(60.8％)	1,304　(44.4％)	832　(83.9％)	151	392　(98.5％)
G	3,160　(8.1％)	908　(28.3％)	1,427	470	257
H	3,252　(53.4％)	873　(44.3％)	1,450　(62.9％)	324　(43.5％)	474　(62.7％)
I	6,010　(62.7％)	3,491　(82.9％)	974	1,028　(84.9％)	369
J	1,283　(16.9％)	1,276 (17.0％)			
K	2,522　(85.6％)	2,480 (87.1％)			

※（　）内はコピペした文字数の割合

40) 吉村清「FDレポート:大学で蔓延するコピペ文化弊害への解決の糸口」『琉球大学欧米文化論集』（琉球大学）、Vol.53、2009年、p.75,86,88

41) 豊田雄彦、奥村憲「レポート作成支援プログラムの開発とレビュー」『自由が丘産能短期大学紀要』（自由が丘産能短期大学）、Vol.39、2006年、pp.105-108「これでできる！レポートの書き方」

42) 峯脇さやか「教師のためのレポート評価支援～『コピペ』レポートの検出～」『弓削商船高等専門学校紀要』（弓削商船高等専門学校）、Vol.33、2011年、pp.72-75

43) 高橋勇、宮川勝年、小高知宏、白井治彦、黒岩丈介、小倉久和「Webサイトからの剽窃レポート発見支援システム」電子情報通信学会論文誌D、Vol.J9C-D、No.11、2007年、p.2989-2999

もっともコピペの割合が高かったＫは、留学生が書いた章立てができていないレポートで、自身の文を挟むことなく６ヶ所からのコピペをそのまま組み合わせていた。文末の修正も行わないため、敬体・常体が混在している。参考文献は２件記載されていたが、脚注で出所を明らかにする情報はない。引用と見なす条件①②③を満たしていなかった。

Ｉは異常データと見なした6,010字レポートで、「はじめに」82.9％「考察」84.9％がコピペだった。「はじめに」では冒頭1,036字が出所を明記しないでコピペし、その後調査した内容を脚注で出所を明記した引用で262字続く。その後は指示書にあった書く内容「なぜ、企業は個人情報を収集する必要があるのか。それは、」に続いて出所を明記しないコピペ258字でその回答を書いていた。さらに「現在の日本で、個人情報の収集・管理・保護に関しての問題点をあげると以下のようなものと考える。」として、出所不記載のコピペ167文字が書かれていた。その後個人情報保護法の説明がウィキペディアからのコピペ1,433文字で記される。考察でも、「事態の調査結果からわかったことは」に続き、脚注で出所を明らかにして615字のコピペが書かれている。この段落の文末は「違うのではないか。」と自分の意見のような記述になっている。さらに「私は以下のように考える」として、考えの根拠となる部分を258字コピペしている。

Ｆは、「はじめに」の個人情報を保護する理由382字と問題点196字を、出所情報一切なしでコピペしていた。問題点の部分は「例として」と具体的な記述を述べているのだが、要約ができていない。保護する理由382字は自分で文章産出をすべきところをコピペで済ませていた。Ｆは「個人情報がどのような範囲で守られているか」などの疑問・関心を持ち「個人情報保護法について」というテーマを選んでいたが、個人情報保護法についての調査にとどまり、「結果」では節に分けず冒頭から693字丸ごとコピペでの記述にしている。その後134字の文章産出をしているが、概要、原因、影響、対策という盛り込むべき内容を盛り込まない形でのコピペである。「おわりに」では冒頭から359字をコピペし、最終部分に「と言った目的と定義、他にも影響・解決を再認識できた。」と付け加えているだけであった。小テーマとして選んだものが具体的な問題事例あるいは具体的な問いになっていないことから、答えを導き出すことができず、課題指示書で指示した内容を無視する形でコピペによる記述にとどまっていたのではないかと推測する。

Ｈは、各章に半分程度のコピペが入っている。「はじめに」では「なぜ個人上を保護する必要があるのか」をキーワードにインターネット検索し、「今、なぜ個人情報保護が必要なのか」というタイトルのwebページの記述をそのままコピペし、文末だけ敬体から常体に変えていた。「結果」の「事件が起こった背景、理由、原因」は１節が丸ごとコピーだった。図や表を含めてwebページの１／３の部分をそのままそっくりコピペして、文末を変えていた。「事件解決のための方策、対策」の節では、webページに掲載されていた図についての説明をテキスト文に変え、具体事例は文章をそのままコピペしていた。出所情報はあるが、引用扱いとは言えない状況である。「考察」と「おわりに」は３ヶ所の情報を出所情報が無いまま、一段落ずつコピペして組み合わせて文章化していた。自分で文章産出すべき今後の課題が177字そっくりコピペした文章だった。

以上、問題あるレポート事例を見てみると、他者の著作物を利用する場合、次のような問題点があると言える。

1．「引用部分が主で自身の著作物が従」になっている状態は引用に該当せず、やってはいけないことであるという認識が低い。
2．引用の仕方についての理解が不十分である。脚注で出所を明らかにすることで条件をクリアしたと勘違いしてしまい、「」やレイアウト変更により自分自身で産出した文章と他者が産出した文章（著作物）を区別する処置をとっていない。
3．出所を明らかにしていないで他人が産出

した文章を自分が産出したように見せかけて、自分のレポートとして提出する行為が剽窃にあたることを認識していない。脚注で出所を明らかにしていたレポートが6割にとどまり、参考文献が正しく記述されていたレポートが4割であったことから、自分以外の人が産出した文章を利用する場合には出所を明らかにしなければいけないことの重要性が十分認識されていないと考えられる。

4．レポートに盛り込む内容をキーワードにしてインターネット検索をし、検索する際のキーワードを主語として、そこで得た情報をそのままコピペして述語としてしまっている。本来であれば、キーワード検索した結果リストから複数のwebページ情報を閲覧し、そこから情報を取捨選択し、内容を理解・判断し、自分の言葉でまとめ直す作業をしなければいけない。しかし、調査した結果から自分で文章産出するのではなく、１か所の他者の著作物をそのまま自分の回答として利用してしまっている。

5．800字を超えるような大量の文章を、要約を行わずにそのままコピペしている。今回のレポートは調査報告であり事実の報告が中心だから、調べた事実を適切な引用扱いで記述する必要がある。しかし、指示書で、「引用する場合は、引用分量が多すぎないこと。なるべく自分で文をまとめること。」と注意して、大量の情報は自分で要約するように促したが、それができていない。木下は「引用文が400字以内、引用文が自分の書く全文の２割以内」[44]としている。引用文の割合を２割以下にすることは難しいかもしれないが、「引用文は400字以内」という制限を設け、積極的に要約を促す必要があったと考える。

6．ウィキペディアのように、文責を明らかにせず信頼性が低い情報を、吟味しないままコピペして利用している。米澤が学術的著作に比べてWikipediaなどのWebページで匿名の執筆者情報は、、情報の出典が明らかではなく、可変的で信頼性の保証がない[45]と述べるように、レポートや論文などでは、文責がはっきりしないウィキペディアの情報を引用しないことは広く知られている。私は調査対象をざっと知るにはいいが、引用するには不適切で別の資料でも二重に確認する必要があることを授業中に話した。しかし、コピペだけでなく、正式な引用扱いでウィキペディアの情報を利用する事例が４レポートあった。そのうち２つでは引用先の半分以上がウィキペディアであった。また、はてなキーワードの利用も２レポートあった。

7．自分の意見を述べるところで、他者の著作物を自分の意見として偽って掲載していた。「考える」という文末表現は意見を述べる時に使う言葉である。木下はレポートを書く上での最も基本的な心得として「調査・研究の結果わかったこと事実を客観的に、筋道を立ててまとめて書く」「レポート中に書き手の意見が要求されている場合には、それが事実ではなく意見であることがはっきりわかるように書く。意見の当否を検討できるように、意見の根拠を明示しておくことが肝要である」を挙げ、「レポート・論文の類を書くときに第一に必要な心得は、この二つ（事実と意見）をはっきり別ものとして取り扱うことだ」[46]と述べている。事実（他者の見解を含む）は「である」という客観的文末表現で記述し、意見は「考える、想定する、推論する、思う、感じる、…」という主観的文末表現で記述する[47]というルールからすれば、「〇〇と思う」と書いた意見を述べる文の〇〇が120字のコピペでは、自分で文章を作り出す努力をしていないことになる。今後の課題がすべてコピペであるレポート、「はじめに」

44) 木下是雄『レポートの組み立て方』筑摩書房、1994年、p.107

45) 米澤誠「レポート作成におけるコピペ防止策 コピペを超えるライティング授業デザイン」『情報管理』（独立行政法人 科学技術振興機構）、vol.52、No.5、2009年、p.282

46) 木下是雄『レポートの組み立て方』筑摩書房、1994年、p.9、p.25

47) 木下是雄『レポートの組み立て方』筑摩書房、1994年、p.159

図９　レポート評価別に見た期末レポート作成の大変さ

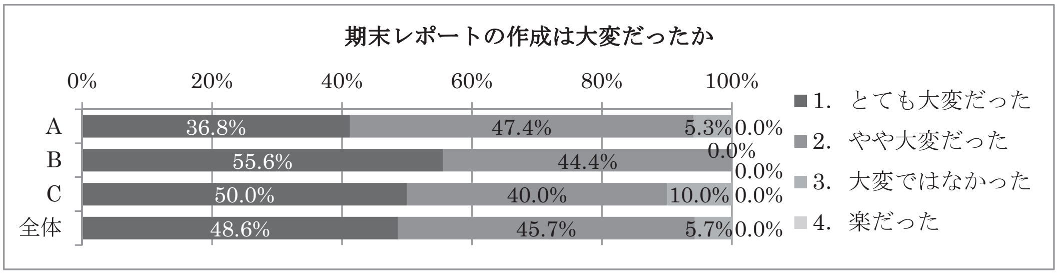
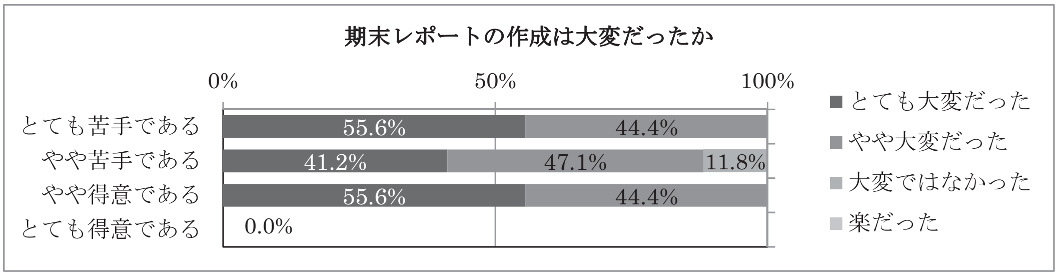


図10　苦手意識のある学習者の期末レポート作成の大変さ



「考察」「おわりに」などで意見を述べるように指示した章が100％コピペであるレポートが存在することは、他人の意見を自分の意見に見せかけてしまうというもっともしてはならないことをしている点で大変大きな問題である。自力で文章を産出する文章力が無ければ安易なコピペに陥ってしまうことが推測できる。米澤が「正しいレポート」と「コピペレポート」の構造比較を示す中で説明する論述の入れ子構造[48]のように、他者の見解を引用で述べた後それに対して同意するのか、疑問を持つのか、反対するのかなどの自分の意見を理由づけして述べることを課題指示書で指導すべきだったと考える。

⑷　レポート作成者の負担感と従来のレポート形式の課題に対する意識

レポート作成後に実施したWebアンケートの結果から、レポート課題指示書を用いて従来のレポート形式を課した場合の大変だった作業、苦労したことなどの負担感を分析した。

Ⅰ）レポート課題指示書を用いて従来のレポート形式の課題を課した場合の負担感

レポート作成が大変だったかレポートの評価別に集計したところ（図９）、「楽だった」は皆無で、「とても大変だった」「やや大変だった」がほぼ同数で、合わせると95％と大半が負担感を感じていた。評価B、評価Cでは「とても大変だった」が50％以上を占め、レポート課題指示書を用いた従来のレポート形式の課題が負担の大きい課題だったことがわかる。

レポート作成が大変だったかを苦手意識の程度により集計したところ（図10）、「とても苦手である」「やや得意である」受講者では55％が「とても大変だった」と感じていた。文章を書くことへの苦手意識の程度による差はほとんどない。

大変だった作業の段階を４つ以内で挙げてもらったところ（表９）、「レポートの構想を練る」60％、「文献調査」43％、「脚注の挿入、参考文献表の作成」43％、「小テーマの設定」40％と、序論、本論、結論の文章作成以外の

48)　米澤誠「レポート作成におけるコピペ防止策　コピペを超えるライティング授業デザイン」『情報管理』（独立行政法人 科学技術振興機構）、vol.52、No.5、2009年、p.281

部分で高い値を示している。レポート作成指示書に書く内容の指示があったことで、負担感が減ったと推測できる。

もっとも大変だったことを自由記述で書かせて項目別に分類（表９）してみると「小テーマの決定」が25.6％ともっとも多くなり、「文献調査」「脚注の挿入、参考文献表の作成」、「小テーマの決定」各10.3％となった。上位を占めたものは、４つ以内複数選択で集計した結果と同じであった。ただ、「結論「５.おわりに」の執筆」の負担が15.4％で、指示書があっても負担が大きかったことがわかる。

指示書で書き方を詳細に指示した脚注参照、参考文献表の作成は「脚注に挿入は、今までやったことがなかったのでどうやって入れたらいいか始め手間どった」「未知の世界なので大変苦労した」「一つの参考文献を繰り返し使うことがあったが、本当に脚注を増やす必要があったのかの判断が難しかった」など、経験不足による困難さがうかがえる。脚注に出所を入れる方法について講義室でスクリーンを使った操作説明を行っただけで、パソコン教室を使って実際にソフトウェアを使った操作説明をしているわけではない。脚注に出所を書くことと参考文献に書くこととの関連についても「脚注や参考文献をどうしたらいいのか少し分からなかったのでこれでいいのか不安だった」という回答があったように説明不十分だったと考えられる。

レポート評価別や苦手感別で大変だった作業を見ると（表10）、それぞれのグループで大変だったことに違いがある。「レポートの構想を練る」が大変だったことは共通しているが、レポート評価が高い、苦手感が少ない受講者は「脚注の挿入、参考文献表の作成」に負担感を感じていた。レポート評価が低い、苦手感が強い受講者にその負担感が少ないということは、引用に対する認識が低く出所情報を記入していないため負担感が少なかったと推測される。また、レポート評価が低い受講者には、コピペをして文章産出の負担感を軽くしたこと、記述内容の少なさ、深まりのなどのクオリティの低さがあり、それが執筆過程で負担感をあまり感じていないことにつながっていると考えられる。評価が良いレポートでは「はじめに」に負担感を感じていることから、中心事例以外の情報収集にも力を入れたことで内容が充実して評価を高めていると推定される。「考察」「おわりに」などの執筆で負担を感じたことは、この章の内容の向上によって良い評価に結び付くことがわかる。

「とても苦手」な学習者は、他の群に比べて結論の執筆への負担感が高かった。「考察になにを書いたら良いのか分からず苦労した」

表９　公共情報システム論受講者がレポート作成において大変だった作業

大変だったのはどの段階の作業だったか
（１つ以上４つ以内で複数選択したもの）

小テーマの決定	40.0%	4位
文献調査	42.9%	2位
レポートの構想を練る	60.0%	1位
序論「1．はじめに」の執筆	28.6%	
本論「2．調査の方法」の執筆	14.3%	
本論「3．結果」の執筆	14.3%	
本論「4．考察」の執筆	31.4%	5位
結論「5．おわりに」の執筆	25.7%	
脚注の挿入、参考文献表の作成	42.9%	2位

もっとも大変だったのはどんなことか
（自由回答を項目別に分類したもの）

小テーマの決定	25.6%	1位
文献調査	10.3%	3位
レポートの構想を練る	10.3%	3位
序論「1．はじめに」の執筆	2.6%	
本論「2．調査の方法」の執筆	0.0%	
本論「3．結果」の執筆	0.0%	
本論「4．考察」の執筆	5.1%	
結論「5．おわりに」の執筆	15.4%	2位
脚注の挿入、参考文献表の作成	10.3%	3位
その他	20.5%	

※「その他」には、「全部大変だった」「パソコン操作」「レポートの内容を考え文章化すること」「文章を組立方がむずかしかった」「ですますが使えなかったこと」などがあった。

表10　公共情報システム論　大変だった作業（レポート評価別、苦手意識別）

大変だったのはどの段階の作業でしたか？（１つ以上４つ以内でチェックを入れる）　▲50%以上　△40%台

分類	全体	評価A	評価B	評価C	やや得意	やや苦手	とても苦手
小テーマの決定	40.0%△	47.4%△	22.2%	40.0%△	44.4%△	35.3%	44.4%△
文献調査	42.9%△	31.6%	55.6%▲	40.0%△	22.2%	47.1%△	55.6%▲
レポートの構想を練る	60.0%▲	52.6%▲	66.7%▲	60.0%▲	44.4%△	58.8%▲	77.8%▲
序論「１．はじめに」の執筆	28.6%	47.4%△	11.1%	0.0%	44.4%△	29.4%	11.1%
本論「２．調査の方法」の執筆	14.3%	10.5%	0.0%	30.0%	11.1%	11.8%	22.2%
本論「３．結果」の執筆	14.3%	10.5%	11.1%	20.0%	22.2%	11.8%	11.1%
本論「４．考察」の執筆	31.4%	26.3%	44.4%△	20.0%	22.2%	35.3%	33.3%
結論「５．おわりに」の執筆	25.7%	21.1%	33.3%	20.0%	33.3%	11.8%	44.4%△
脚注の挿入、参考文献表の作成	42.9%△	47.4%△	33.3%	30.0%	55.6%▲	41.2%△	33.3%

「「５．おわりに」の部分がなかなかまとまらなかった」「苦労したのは、結論の部分。自分の考えと調べた結果を文章にまとめるのが難しいと思った。」と述べており、負担感が強かったことがわかる。

大変だったところの自由回答（表11）には、「情報の真偽性を確認するのに苦労した」「根拠を探すところ」「レポート独特の書き方・説明の仕方が論理的ではあると思われるが、一般社会の方法論ではない（と思われる）ので戸惑いが多かった」と、レポート作成課題で養いたい論理的思考（ロジカルシンキング）や批判的思考（クリティカルシンキング）に関連するものがあった。一方で「調査の起承転結がまとまっている資料を探す作業が大変だった。〈書くことはやや得意〉」「テーマの中で結論のはっきりしているWebページを発見するのも探すのも苦労した〈書くことはやや苦手〉」と、自分で複数の資料を調べてまとめる作業や、自分で結論を導き出す姿勢を持っていない受講者がいた。これは、従来のレポート形式であっても、自分の意見を書くのではなく、誰かの文章をそのまま使おうとコピペしてしまう問題点の表れであると考える。

表11　レポートを書く上で最も苦労したところ（自由記述を分類した）

小テーマの決定	・大きく個人情報を扱ったものといった設問から自分でテーマを決定するところ、思っていたよりも多くの問題があって大変だった。〈やや得意〉 ・テーマを探すこと。問題がすぐに浮かばなかったので。〈やや得意〉 ・小テーマを決めるときにどういう構成にするのかを考えていたため、書いてまとめるときに苦労した。〈やや苦手〉 ・なかなか決まらなかったから。〈やや苦手〉 ・何について書いていいか決まらず、なかなかまとまらなかったところ。〈やや苦手〉 ・どの事例、問題を使って書こうかとても苦労した。〈とても苦手〉 ・漠然としすぎていること、情報漏洩の事件はそうぞう以上に多かったため。〈とても苦手〉 ・ひとつにテーマを絞るのに時間がかかったから。〈とても苦手〉

文献調査	・調査の起承転結がまとまっている資料を探す作業が大変だった。〈やや得意〉 ・テーマの中で結論のはっきりしているWebページを発見するのも探すのも苦労した。〈やや苦手〉 ・たくさんの事例から選ぶのが苦労した。（どの事例もよさそうだったので、どれにしようか迷った）〈やや苦手〉 ・テーマに対する資料が集まらなかった。情報漏えいは企業も隠したいところであり、本も捜したが手に入らなかった。遠鉄デパートの件は数少ない資料であった。〈やや苦手〉 ・レポートの資料を整理するところだと思う。〈やや苦手〉
レポートの構想を練る	・どのように話を進めていき、どう終わらせるか決まらなかった。〈やや得意〉 ・設問の答えの差別化が難しかった。〈やや苦手〉 ・構想を練る段階でまとめるのが大変だった。〈やや苦手〉
序論「1.はじめに」の執筆	・はじめにを自分の言葉で考えて書くということが苦労した。〈やや苦手〉
本論「4.考察」の執筆	・考察になにを書いたら良いのか分からず苦労した。〈とても苦手〉
結論「5.おわりに」の執筆	・うまく最後の「おわりに」をまとめること。〈やや得意〉 ・まとめ方に困った。〈とても苦手〉 ・なかなかまとまらなかった。〈とても苦手〉 ・自分の考えと調べた結果を文章にまとめるのが難しいと思った。〈とても苦手〉
脚注の挿入、参考文献表の作成	・参考文献表の作成に関しては、未知の世界なので大変苦労した。〈やや得意〉 ・脚注に挿入は、今までやったことがなかったのでどうやって入れたらいいか始め手間どった。〈やや苦手〉 ・脚注や参考文献をどうしたらいいのか少し分からなかったのでこれでいいのか不安だった。〈やや苦手〉 ・参考文献の文の入れ方。一つの参考文献を繰り返し使うことがあったなど、本当に脚注を増やす必要があったのかの判断が難しかった。〈やや苦手〉 ・引用のやり方、どこで引用を使えばいいのかよくわからなかった。〈やや得意〉
その他	・レポート独特の書き方・説明の仕方が論理的ではあると思われるが、一般社会の方法論ではない（と思われる）ので戸惑いが多かった。〈やや得意〉 ・情報の真偽性を確認するのに苦労した。〈やや苦手〉 ・留学生だから書くのはあまり上手ではない。〈やや苦手〉 ・文章を考えること。〈やや苦手〉 ・根拠を探すところ。〈とても苦手〉 ・時間がギリギリだったこと。〈とても苦手〉

前節でレポート課題指示書があったことで「とても書きやすかった」「順を追って書くことができた」「あるとやる気が出る」と答えた回答者だが、文章を書くことは「とても苦手」でレポート評価はCであった。他者の書いたものをコピペしていたわけではない。しかし、裏付けに基づいて論拠を示しながら論理的に述べるということができていなかった。レポート課題指示書によって、レポートを作成することはできたが、「書きたい内容をうまく繋げて一つの方向に向けること」にもっとも苦労し、参考文献の読み込みが少ないことをアンケートで述べていた。

Ⅱ）中間や期末の課題として望まれるレポートの形式

「期末の課題として、今回のように「個人情報の漏えい、個人情報の収集、管理、保護に関する問題」という大きなテーマのもとに自分で小さなテーマを決めてレポートを作成するのと、調査報告書のような小さな設問に答えるやり方とでは、どちらがいいですか？」の質問に対しての回答（表12）を見てみると、全体では従来のレポート形式49％、小設問形式51％と均衡していた。2008年度公共情報システム論のアンケート結果（従来のレポート形式34％、小設問形式66％）に比べ、従来のレポート形式を望む意見が15％も多かったことは、レポート作成指示書による支援により、従来のレポート形式を敬遠する気持ちが薄らいだと推測される。

書くことに対する苦手意識の視点で見てみると（図11）、従来のレポート形式課題である2010年度の場合「やや苦手」群が他の群とは違い、従来のレポート形式を望む意見が小設問形式を５％上回っている。「とても苦手」群では、逆に小設問形式が従来のレポート形式を10％上回っている。しかし、小設問形式の課題だけを課していた2008年度に比べ「とても苦手」群であってもレポート形式を望む率が25％増えている。レポート作成指示書により支援した場合は、苦手意識を持っている学習者であっても従来のレポート形式を敬遠する気持ちは薄らいでいると推測できる。

だが、図１、図２での苦手意識のある学習者のレポート評価の違いと、望むレポート形式の回答を併せて考えると、今回のレポート作成指示書によるレポート作成支援は「やや苦手」群においてもっとも効果を発揮したが、「とても苦手」群では効果が少なく、やはり「とても苦手」群ではスモールステップによる小設問形式のほうが課題として向いていると考えることができる。

Ⅲ）レポート課題指示書を用いて従来のレポート形式の課題を課した場合の学習効果に関する意識

「自分で小テーマを決めてレポートを書くのと、小さな設問に答えるのとでは、どちらのほうが学びが深くなると思いますか？」の質問に対しての回答（図12）を見ると、従来のレポート形式のほうが学びが深くなると答える学習者が全体では46％になり、小設問形式の課題のみを課した2008年度公共情報システム論（図11）に比べ、「取り組み方次第でどちらとも言えない」と「小設問形式」が10

表12　受講者が望む課題スタイル（レポート評価で比較した場合）

	自分で小テーマを決めてレポートを書くほうがいい	小さな設問に答えるほうがいい
全体	48.6%	51.4%
レポート評価A	42.1%	47.4%
レポート評価B	44.4%	55.6%
レポート評価C	50.0%	50.0%

図11　2010年度（従来のレポート形式）と2008年度（小設問形式）で受講者が望む課題スタイル

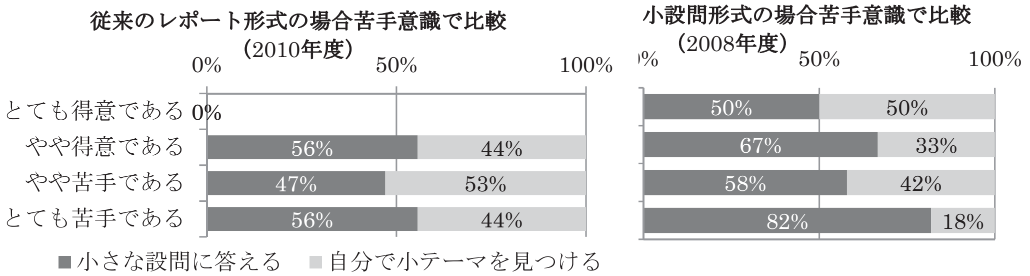


図12　学びが深くなると思われているレポートの形式（2010年度従来のレポート形式を課した場合）

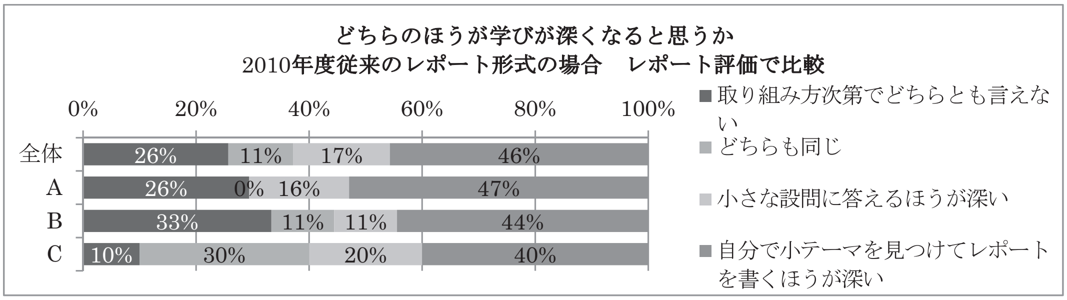


表13　学びが深くなると思われているレポートの形式（2010年度従来のレポート形式を課した場合）

苦手意識	1　自分で小テーマを見つけてレポートを書くほうが深い	2　小さな設問に答えるほうが深い	3　どちらも同じ	4　取り組み方次第でどちらとも言えない
とても得意である	0	0	0	0
やや得意である	44.4%	11.1%	11.1%	33.3%
やや苦手である	47.1%	23.5%	5.9%	23.5%
とても苦手である	44.4%	11.1%	22.2%	22.2%

%以上減っている。レポート評価C群であっても、40%が従来のレポート形式のほうが学びが深くなる、30%がどちらも同じととらえている。

書くことへの苦手意識の視点で集計してみると（表13）、苦手意識の度合いにかかわらず45%程度が従来のレポート形式のほうが学びは深くなると思っている。苦手意識を持つ学習者「やや苦手」「とても苦手」だけ集計したところ、46%だった。全ての課題を小設問形式にした2008年度の23%に比べ、実際に自分で小テーマを見つけてレポートを書かせた2010年度の場合のほうが、自分で小テーマを見つけてレポートを書く課題のほうが学びは深くなると考える学習者が倍増している。

⑸　今後も従来のレポート形式の課題を課すための改善策

レポート作成が苦手な受講者にも従来式のレポートを書く力を身につけてほしい、充実した調査活動をしてほしいという意図から、レポート課題指示書を作成した。

2010年度の公共情報システム論受講者の3/4は書くことに苦手意識がある。「やや苦手」という学習者にとっては、レポート作成指示書によるレポート作成支援は効果を示し、良いレポート評価を得ることにつながっている。しかし、「とても苦手」という学習者では、情報処理演習Bのような演習を含めた長時間のレポート作成指導がないと、レポート作成指示書によるレポート作成支援だけでは良いレポート評価を得ることが困難である。「やや苦手」の学習者は従来のレポート形式による課題を望む気持ちがあるが、「とても苦手」の学習者は従来のレポート形式を敬遠し、小設問形式を望んでいる。しかし、書くことへの苦手意識の有無にかかわらず、従来のレポート形式が学びを深めることに有効であると思っている人が多いので、負荷がかかっても従来のレポート形式の課題を課すことはやるべきであると考える。しかし、今回行ったレポート作成指示書では、序論や本論の文章を書くことを支援することはできたが、小テーマの決定や文献調査、レポートの構成を練ることへの支援はできなかった。また、脚注参照や参考文献一覧の作成に慣れていない学習者は、説明書のみで練習なしでは戸惑うことが分かった。

書く内容を指示したことで調査活動を行って報告することはでき、目的①「問題に対して解答する能力を養う」目的③「取り組んだ問題に関する理解・知識・考えを深める」は

行えたが、コピペで済ますレポートでは、目標を達成できたとは言えない。レポートとして大切な、事実と意見の区別、根拠を示した意見、適切な引用については不十分な仕上がりがあり、目的④「学術論文やビジネス文書を書くための文章力を養う」が十分達成できたとは言えない。そこで、課題指示書を用いて従来のレポート形式の課題を課した時の問題点について改善策を探り、その手立てを次に示す。

Ⅰ）セルフチェックリストの改善

レポートの章立てや文体、参考文献、脚注での出所明示など、レポートの書き方の基本ルールを課題指示書で指示した。句読点や誤字脱字チェックと一緒に章立てや文末表現について、提出前セルフチェック項目を４つ課題指示書に入れておいた。しかし、チェックしたはずの指示内容がすべて盛り込まれているレポートばかりではなかった。

養父・藤安・好木は、欠陥を作り込みやすい事項についてはできるだけ具体的な表現でセルフチェックチェック項目を記述する必要性を説き、誤りが発生しやすい、注意が必要、確認してほしい事項をチェック観点として挙げて[49]いる。今回課題指示書に記載した４項目では少なすぎた。もっと細かいチェック項目が必要だった。吉原らが提案しているチェックリスト[50]より多くなると考える。

レポートが電子データ提出のため、紙ベースではなくWebベースでのセルフチェック方式とする必要があると考える。たyes,noのclosedquestion形式だけでいいのか、根津の提案[51]にある自由記述を加えたopenedquestion形式が必要なのかの検討も必要となる。

養父らはセルフチェックリストには「チェック実施の有無が個人任せとなる、チェックレベルが自己管理となる、チェック内容の理解にバラツキがある」という課題を指摘し、「一方的にチェック項目を提示するのではなく、正確に意図するところを伝える場を設ける。理解不十分のままチェックをおこなわないように指導する。」を提言[52]している。これはセルフチェックリストだけに言える問題ではなく、課題指示書という紙面で一方的に指示することにも共通した課題だと考える。課題指示書で指示する内容の理解だけでなく、チェックリストでチェックすることの意義や重要性を十分に理解する場を設け、モチベーションの維持を図る必要がある。

Ⅱ）指示内容について十分な理解を促すための説明

今回、ワープロソフトの使い方も含めて、課題指示書とその指示に従って従来のレポート形式の課題についての説明時間は40分程度しかとっていなかった。専門科目の期末レポートであり、指示書やチェック項目への理解のための時間は60分程度までしかとることができない。限られた中で意図や操作説明などの時間不足を補うために、見本レポートを用意する必要がある。見本レポート（模範レポート）を学生に公開して参考にさせることについて、効果があるとする意見[53][54]と模倣を生むという意見[55]がある。しかし、今回の課題指示書のように一部の項目のみ見本を示しても、十分伝わらない。指示する大テーマとは

49) 養父利浩、藤安克彦、好木健一「セルフチェックリストを活用した欠陥予防について」『プロジェクトマネジメント学会誌』（プロジェクトマネジメント学会）、Vol.12、No.5、2010年、pp.3-8

50) 吉原恵子・間渕泰尚・冨江英俊、小針誠『スタディスキルズ・トレーニング』実教出版、2011年、p.95

51) 根津朋実「「特別活動の評価」に関する課題と方法--チェックリスト法の提案」『筑波大学教育学系論集』（筑波大学教育学系）、Vol.35、2011年、p.61

52) 養父利浩、藤安克彦、好木健一「セルフチェックリストを活用した欠陥予防について」『プロジェクトマネジメント学会誌』（プロジェクトマネジメント学会）、Vol.12、No.5、2010年、p.5

53) 米澤誠「レポート作成におけるコピペ防止策コピペを超えるライティング授業デザイン」『情報管理』（独立行政法人 科学技術振興機構）、vol.52、No.5、2009年、p.278

54) 豊田雄彦、奥村憲「レポート作成支援プログラムの開発とレビュー」『自由が丘産能短期大学紀要』（自由が丘産能短期大学）、Vol.39、2006年、p.100

55) 関護雄「〈研究報告〉教え方の工夫（続）（資料）」『沼津工業高等専門学校研究報告』（沼津工業高等専門学校）、Vol.20、1986年、p.154

異なるテーマで解説付きのレポート見本を作り、それを明示することで説明の補助をする必要があると考える。

小設問形式の課題で出所を明記する訓練はしていても、従来のレポート形式の課題で行う、脚注、適切な引用の範囲と方法、参考文献の書き方については不慣れで戸惑うことが分かったので、実際にパソコンを使って見本レポート上で作業訓練を行う機会を用意する。

Ⅲ）デジタル情報カードの利用

今回の分析で明らかになった問題点（出所不明で引用・コピペする、主観的文末表現の文でもコピペして済ます、事実と意見を区別して表記しない、引用に該当しないような長文を要約せず利用する）を解決しなければ、レポートの完成度を上げることはできない。形式面での完成度ではなく、内容面での完成度が高いレポートを書かせるには、田町の実践[56]にあるように、添削してフィードバックさせる手立てが必要となると思われる。しかし、レポート作成を学ぶ科目ではなく、専門科目の期末レポートでは、そこまで手をかけることができない。添削＆フィードバックではない形で完成度を高めるにはどうしたらいいか。１つは受講者が文献調査にかけた作業を教員側で把握できる手段が有効だと考える。

今回脚注で出所を明らかにさせたことだけでも、教員はその出所先情報を確認することができ、受講者の調査活動の一部を把握することができた。新聞記事をスキャニングしてレポートと一緒に提出した受講者がいたが、このように調査して得た情報をきちんと保管しておく重要性を受講者に理解させたい。豊田はレポート作成に当たって引用するなど主に参考にした部分はワークシートの裏面にセロハンテープで貼り付けて提出[57]させていた。受講者の調査活動の結果を紙ベースで出させるのは大変だが、デジタルデータとして提出させるのであれば、大量の情報でもかさばらず、ネットワーク経由で教員が受け取ることも可能だ。受講者が調査活動で入手したすべての情報をデジタルデータとして教員に提出することができれば、教員は出典明示された資料の引用箇所を容易に確認することができるだけでなく、受講者が資料をどのようにまとめたかも知ることができ、出典明示しなかった資料の存在も把握できる。教員が受講者の調査活動の様子（活動ログ）知る手立てとなる。受講者にとっても、デジタルデータなら大量のデータも一括保管できるし、検索もスムーズである。情報の加工や利活用も容易である。

そこで、桑田・野村・眞田が図書館に置くといいと提唱している情報カード[58]をデジタル化し、得た情報を原文のまま情報カードに入力させる方法をとる。さらに調査日、要約した文章、出典情報を入力する欄も設ける。事実と意見を明確に分けるには、自力で文章を作り出すことが必要だ。事実を自分の言葉でまとめ直す要約が自分で文章を作り出す練習になる。情報カードを書かせることで、情報を手元に保管するだけでなく、要約の訓練になり、出典を記録する習慣を身につけさせることができる。授業において情報収集する場合の記録としての保存は、著作権上では、「学校その他の教育機関において授業目的で複製する行為」「私的使用のための複製」に該当すると思われ、著作権上も問題はないと判断[59]する。調査活動で入手した情報をデジタル研究カードに蓄積し、その中からレポートを作成するための情報を取捨選択し、まとめるという作業をさせる。レポート提出時にデジタル調査カードも併せて提出させるようにする。

---

56) 田町典子「レポート添削指導に関する事例報告」『經營と經濟:長崎工業經營專門學校大東亞經濟研究所年報』（長崎大学）、Vol.87、No.1、2007年、pp.103-115

57) 豊田雄彦、奥村憲「レポート作成支援プログラムの開発とレビュー」『自由が丘産能短期大学紀要』（自由が丘産能短期大学）、Vol.39、2006年、p.108

58) 桑田てるみ、野村愛子、眞田章子『中学生・高校生のための探究学習スキルワーク第２版』チヨダクレス(株)、2010年、p.35

59) 文化庁「学校における教育活動と著作権」http://www.bunka.go.jp/chosakuken/hakase/pdf/gakkou_chosakuken.pdf（参照2012年８月28日）

Ⅳ）事実と意見の区別

事実と意見の区別については、小設問形式の課題では、調べた事実とそれについての意見を別の設問にすることで分離できた。しかし、従来のレポート形式で事実と意見を区別させるには、課題指示書で指示するだけでは実現が難しい。自分の意見さえコピペで済ませてしまう現状を見ていると、「レポートでは事実と意見を区別することが大切である」という認識も浸透しているとは言えないと思う。期末レポートという一時的な作業時間だけでなく、日頃の授業の中にシンキングシートを取り入れて、シンキングシート上で事実と根拠を示した意見を筋道立ててまとめていく訓練を行う必要があると考える。また、吉村の提案する自己主張している文章に必ず下線を付けさせる手立て[60]も取り入れたい。

事実と意見を区別し、根拠を示した意見を書くように要求すれば、当然文字数は増えていく。その場合、レポート全体の文字数指定を4,000字という目安を設けるほうがいいのか、3,000字以上あるいは5,000字以下のように下限・上限を示すほうがいいのか、今後の課題である。「」や異なるレイアウトで直接引用する場合の制限を設けることも、間接引用（自分でまとめなおす、要約する）を促すために必要だと考える。ただし、1件が400字以下、全体に対する量的目安を20％以下にする[61]いう制限でいいかどうかは検討の余地がある。

Ⅴ）小テーマの決定や構想を練る活動への支援

小テーマの決定や構想を練るなどの大変だった作業は、レポート作成指示書では支援しにくいところである。このような書類では支援しにくい部分をどのようにどの程度支援するかも今後のレポート作成指導で検討すべき課題である。情報処理演習Bで行ったようなマインドマップやマンダラートなどを使ってテーマを絞り込む支援や、レポートを書く前にセンテンス・アウトラインを書かせて提出させる[62]、アウトラインシートに記入させて提出する[63]方法がある。ただ、そのためには、課題を提示してからレポート提出までの時間を十分取る必要があり、教員が添削しフィードバックする必要もある。専門科目の期末レポートとして支援する手段としては受講者、教員ともに負担が大きい。この部分をワークシートやシンキングシートを使うことで自主的な作業活動としてやらせることができるのか、今後の課題とする。

4．結論

公共情報システム論の調査報告課題において、レポート作成が苦手な受講者でも従来のレポート方式の課題に取り組めるための支援策としてレポート課題指示書を用意した。レポート課題指示書でレポートの書き方や書く内容を指示して報告型レポートに取り組ませたところ、中央値としてレポート全体文字数（表紙を除く）：2,344字、はじめに：853字、調査方法：62字、結果：703字、考察：338字、おわりに：257字、参考文献：3件というレポートが作成できた。文章を書くことに対する苦手意識が弱い受講者には有効だったが、苦手意識が強い受講者にとっては有効な支援手段とはならないことがわかった。要約しない安易な引用や不適切なコピペの存在、事実と意見の区別ができないなどの問題点が判明した。一方、受講者は従来のレポート形式の課題を課すことで学習の深まりは感じているので、今後も従来のレポート形式課題を課したい。そのための改善策として、セルフチェックリストのWebアンケート化、デジタル情報カードの提出義務化、事実と意見を区別するための手立て等を検討した。

すでに2011年度、2012年度の公共情報シス

60) 吉村清「FDレポート:大学で蔓延するコピペ文化弊害への解決の糸口」『琉球大学欧米文化論集』（琉球大学）、Vol.53、2009年、p.89

61) 石坂春秋『レポート・論文・プレゼンスキルズ』くろしお出版、2003年、p.103（木下の説に基づいている。）

62) 吉村清「FDレポート ：大学で蔓延するコピペ文化弊害への解決の糸口」琉球大学欧米文化論集（53）、2009年、p.78

63) 渡邊淳子「ライティング教育に向けた指導法および教材開発」大学教育年報 14（熊本大学）、2011年p.25

テム論では、デジタル情報カードを利用した従来のレポート形式の課題を課している。今後は、検討した改善策を取り入れ、4つの目的を達成できるような課題にしていきたい。

＜参考文献＞

- 石黒圭『論文・レポートの基本』日本実業出版社、2012年
- 石坂春秋『レポート・論文・プレゼンスキルズ』くろしお出版、2003年
- 江口聡「レポートの書き方」http://melisande.cs.kyoto-wu.ac.jp/eguchi/memo/report.html（参照2012年8月30日）
- 小笠原喜康『大学生のためのレポート・論文術』講談社、2002年
- 小野博「日本の大学生の基礎学力構造とリメディアル教育」『NIME研究報告6-2005』(独立行政法人 メディア教育開発センター)、2005年、pp.1-6
- 片山章郎「新入生の文章能力に関する一考察」『教育情報研究』（日本教育情報学会）Vol.17、No.3、2001年、 pp.184-187
- 北尾謙治、実松克義、石川有香、早坂慶子、西納春雄、朝尾幸次郎、石川慎一郎、島谷浩、野澤和典、北尾 S. キャスリーン『広げる知の世界－大学でのまなびのレッスン』ひつじ書房、2005年
- 木下是雄『レポートの組み立て方』筑摩書房、1994年
- 金田一晴彦・長谷川孝士他『三省堂中学校教科書　現代の国語１』三省堂、2006年
- 桑田てるみ、野村愛子、眞田章子『中学生・高校生のための探究学習スキルワーク第2版』チヨダクレス(株)、2010年
- 齋藤智世「公共情報システム論の授業における小設問形式を採用した学習課題の改善」『環境と経営』(静岡産業大学経営研究所)、Vol.15、No.2、2009年、pp.43-57
- 酒井聡樹『これからレポート・卒論を書く若者のために』共立出版、2007年
- 阪田せい子、ロイ・ラーク＋黎明出版編集部『だれも教えなかった論文・レポートの書き方』黎明出版、1998年
- 佐渡島紗織「大学における「書くこと」の支援:早稲田大学国際教養学部における「ライティング・センター」の発足」『全国大学国語教育学会発表要旨集』(全国大学国語教育学会)、Vol.109、2005年、pp.193-196
- 静岡産業大学経営学部『SSUガイド2009「授業と学生生活」』静岡産業大学経営学部、2009年
- 静岡産業大学経営学部『学ぶための技法Basic Seminar』静岡産業大学経営学部、2003年
- 関護雄「〈研究報告〉教え方の工夫（続）(資料)」『沼津工業高等専門学校研究報告』(沼津工業高等専門学校)、Vol.20、1986年、pp.153-161
- 高橋勇、宮川勝年、小高知宏、白井治彦、黒岩丈介、小倉久和「Webサイトからの剽窃レポート発見支援システム」電子情報通信学会論文誌D、Vol.J9C-D、No.11、2007年、pp.2989-2999
- 田中共子編『よくわかる学びの技法第2版』ミネルヴァ書房、2009年
- 田町典子「レポート添削指導に関する事例報告」『經營と經濟:長崎工業經營専門學校大東亞經濟研究所年報』(長崎大学)、Vol.87、No.1、2007年、pp.103-164
- 中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて答申（案）第2章学士課程教育における方針の明確化　第3節入学者受入れの方針について」、2008年、p.18（参照2009年3月20日）http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/08103112/003.htm
- 中央教育審議会「第2章 第2節 教育課程編成・実施の方針について－学生が本気で学び，社会で通用する力を身に付けるよう，きめ細かな指導と厳格な成績評価を－」大学分科会（第71回）議事録・配付資料［資料4－2］(文部科学省)、2007年、(参照2009年3月20日)http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/08103112/00

3/004.htm
・戸田山和久著『論文の教室』日本放送出版協会、2002年
・豊田雄彦、奥村憲「レポート作成支援プログラムの開発とレビュー」『自由が丘産能短期大学紀要』（自由が丘産能短期大学）、Vol.39、2006年、pp.95-110
・根津朋実「「特別活動の評価」に関する課題と方法--チェックリスト法の提案」『筑波大学教育学系論集』（筑波大学教育学系）、Vol.35、2011年、pp.55-65
・花井等・若松篤『論文の書き方マニュアルーステップ式リサーチ戦略のすすめ』有斐閣、1997年
・花見槇子、鹿島恵『大学生のためのレポート作成ハンドブック』三重大学共通教育センター（国立大学法人三重大学）、2006年
・藤木剛康「日本の作文教育の問題点とライティング・センター」『研究年報』（和歌山大学経済学会）、Vol.15、2011年、pp.109-118
・古群延治『論文・レポートのまとめ方』筑摩書房、1997年
・文化庁「学校における教育活動と著作権」（参照2012年8月28日）
http://www.bunka.go.jp/chosakuken/hakase/pdf/gakkou_chosakuken.pdf
・三重大学共通教育センター『大学生のためのレポート作成ハンドブック』三重大学、2006年
・三重大学情報リテラシー担当「レポートの書き方入門講習会（平成22年度）」（参照2012年8月31日）
http://miuse.mie-u.ac.jp/bitstream/10076/11185/1/report_text2010.pdf
・峯脇さやか「教師のためのレポート評価支援〜『コピペ』レポートの検出〜」『弓削商船高等専門学校紀要』（弓削商船高等専門学校）、Vol.33、2011年、pp.72-75
・文部科学省「国際バカロレア・ディプロマプログラム　Theory of Knowledge (TOK)について」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2012/09/06/1325261_2.pdf（参照2012年9月8日）
・養父利浩、藤安克彦、好木健一「セルフチェックリストを活用した欠陥予防について」『プロジェクトマネジメント学会誌』（プロジェクトマネジメント学会）、Vol.12、No.5、2010年、pp.3-8
・吉田健正『学生と大学院生のためのレポート・論文の書き方［第2版］』ナカニシヤ出版、2004年
・吉村清「09前期「基礎演習」と同「17•.18世紀イギリス文学」期末レポートについての報告」『琉球大学欧米文化論集』（琉球大学）、Vol.54、2010年、pp.89-109
・吉村清「FDレポート:大学で蔓延するコピペ文化弊害への解決の糸口」『琉球大学欧米文化論集』（琉球大学）、Vol.53、2009年、pp.73-97
・吉原恵子・間渕泰尚・冨江英俊、小針誠『スタディスキルズ・トレーニング』実教出版、2011年
・米澤誠「レポート作成におけるコピペ防止策　コピペを超えるライティング授業デザイン」『情報管理』（独立行政法人 科学技術振興機構）、vol.52、No.5、2009年、pp.276-285
・渡邊淳子「ライティング教育に向けた指導法および教材開発」『大学教育年報』（熊本大学）、Vol.14、2011年、pp.25-32

＜資料＞

＜資料１　小設問形式による調査報告課題＞

行政の情報化に関する調査報告書での設問

１．自分が住んでいる地域の自治体の Web ページを見て、次のサービス（9 項目）を行っているかどうか調べなさい。サービスを行っている場合は○、行っていない場合は×をつけなさい。
２．１で調べたこと以外に特徴のあるサービスや気に入ったサービスがあったら、書きなさい。取り上げた理由も書くこと。
３．自治体の図書館の検索サービスで、行政の情報化に関係する図書資料検索を２回行い、検索結果を次の表に書きなさい。注意）検索キーワード１と検索キーワード２は別のものにすること。
４．地元の自治体の Web ページを見て、行政の情報化の様子について、感想を５行以上書きなさい。
５．電子政府、電子自治体など、電子行政サービスが進んで行くことについてどう考えるか、メリットや課題を含めて、自分の考えや意見を５行以上書きなさい。
６．５の設問に答える時に参考にした資料を、次のような書き方で示しなさい。

健康医療分野の情報化に関する調査報告書の設問

１．　健康的な生活をサポートする情報提供
（１）自分が健康的な生活を送るのに役立つと思う Web ページを見つけ、次の表に Web ページの詳細を書きなさい。
（２）なぜ自分の健康的な生活に役立つと思ったか、その Web ページを選択（判断）した理由を書きなさい。
２．医療に関する情報提供
（１）自分が調べたい病気を１つ決めて、その病気に関する情報が提供されている Web ページを２つ以上見て、次の５項目について、知ることができたかどうか、次の４つの中から 1 つを選び、理解度の欄に書きなさい。（４：よく知ることができた　３：だいたい知ることができた　２：あまり知ることができなかった　１：知ることができなかった）
（２）（１）で医療に関する情報提供の様子を調べた感想を３行以上書きなさい。
３．遠隔医療や地域での医療ネットワーク形成と情報化
（１）遠隔医療あるいは地域での医療ネットワークに情報化がどのように役立つのか調べて、情報化の具体例やメリットを書きなさい。
（２）遠隔医療あるいは地域での医療ネットワークの現状や、今後このような医療行為が進んでくために解決すべき問題点や課題は何か、自分の考えや意見を含めて、５行以上書きなさい。
４．1(2)、2(2)、3(1)(2)の設問に答える時に参考にした資料をすべて書き出しなさい。

防災安全分野の情報化に関する調査報告書の設問

１．防災分野の情報提供ページで掲載されている情報とそれを見た感想を書く（メリットあるいは課題と感じることを含めて書く)。
２．和牛肉の販売パッケージに書いてある個別識別情報を使って、牛のトレーサビリティ情報を調べて書く。
３．カルビー(株)の原材料、加工の情報
（１）ポテトチップスなどの商品に記載されている製造日、製造所固有記号から、「じゃがいも丸ごと！プロフィール」のページで生産者と製造所の情報を調べて、書く。
４．石井食品（株）の食品情報
（１）石井食品（株）（通称：イシイ）のミートボールやハンバーグ類のパッケージに記載されている商品名、品質保証番号、賞味期限から、調査サイトで商品情報を調べて書く。
（２）食品に関する情報を検索し、検索結果で得られた情報を見てどう思ったか、消費者の立場に立った感想を３行以上書く。

＜資料２　従来のレポート形式による調査報告課題を課すためのレポート作成指示書＞

Ⅰ　公共情報システム論期末レポートのテーマ

「個人情報の漏えい、個人情報の収集、管理、保護に関する問題」という大テーマのもとに、自分で小テーマを決めて、レポートを作成する。１つの事件や事例、問題を取り上げて、詳しく調査し、その結果を報告する形が望ましい。

【注意】齋藤智世の Web サイトに、扱う事件や事例などの例を掲載しておきます。参考にしてください。
齋藤智世の Web サイトへのアクセスは手順⑤を参照してください。

Ⅱ　レポート作成の手順

①Microsoft word2007 など、共通鍵暗号方式で暗号化できるワープロソフトを使って、レポートを作成する。
【注意】レポートの作成にあたっては、静岡産業大学経営学部の「レポート・論文作成時の注意」に準拠した方法で書くこと。この指示書にも、その一部を掲載しています。参考にしてください。
【注意】齋藤が Microsoft word2007 を使って読むことができる形式にしてください。

②レポート完成後、以下のチェック項目に従ってレポートをチェック＆修正し、□に✔をつける。
□１～５章と参考文献が書いてある
□句点（。）や読点（、）の打ち方が適切である
□「である」体の文章で書いてあり、「です・ます」体や話し言葉が混ざっていない
□誤字、脱字がない

③②のチェックを済ませたレポートを、共通鍵暗号方式を使ってファイルを暗号化して、「学籍番号（半角）＋名前＋公共情報システム論期末レポート」というファイル名で保存する。
【注意】Microsoft Word 2007 で共通鍵暗号方式による暗号化をするには、[オフィスボタン]の[配布準備]にある[ドキュメントの暗号化]を選択し、パスワードを設定します。
【注意】復号化する時に必要なパスワードは、第 13 週（または第 14 週）の授業時のワークシートに記入して、齋藤まで知らせます。

④１月 31 日（月）午後５時までに、③で暗号化して保存したレポートファイルをメール添付で提出する。
提出先メールアドレス：tomoyo-saito@ssu.ac.jp
メール件名：学籍番号（半角）＋名前＋公共情報システム論期末レポート
例）090000 磐田太郎公共情報システム論期末レポート
【注意】メールの書き方のマナーを考慮して本文を書くこと。

⑤1 月 31 日（月）午後５時まで、齋藤智世の Web サイトにある「公共情報システム論」のページで、Web アンケートに答える。
＜「公共情報システム論」のページへのアクセス方法＞
静岡産業大学経営学部→教員紹介→齋藤智世→URL→公共情報システム論→ID、パスワード入力
【注意】ID、パスワード、Web アンケートの合言葉は第 13 週と第 14 週の授業中に伝えます。

Ⅲ　引用の仕方

次の条件を満たしていれば、著作権者の許諾を得ることなく、著作物をレポート内に記述することができる。

１．引用の目的
（１）自分の意見を裏付けるため
（２）他の意見を論評するため
※ 自身の著作物が「主」であり、引用物が「従」であること。
※ 他人の意見を紹介するだけの引用、字数稼ぎのための引用は意味をなさない。
※ 他人の文章を、自分の文章のようにみせかける行為を絶対にしてはならない。

２．引用のルール
（１）「自分の意見」と「他の資料」の区別をきちんとつける。
①「」で区別する。
例.　まず、『国富論』の中から該当個所を引用してみよう。「もちろん、かれは、普通、社会公共の利益を増進しようと意図しているわけでもないし、また、自分が社会の利益をどれだけ増進しているのかも知っているわけではない。（略）目的を促進することになる。」
スミスがここで述べていることは、（略）[1]
※上の例では、「もちろん、…になる。」が引用部分である。

②レイアウトで区別する。
例.　アメリカの南北戦争当時の南部連邦における超インフレについての次のような叙述を考えてみられるとよい。
> われわれは、かつてはポケットにお金を入れて店に行き、食料をバスケットに入れて持ち帰ったものだ。ところが今日では、われわれはバスケットにお金をのせて店に行き、食料をポケットに入れて持ち帰る状態である。（略）不便きわまる物々交換が支配する時代

とはなった。(略)

ドイツ　詳細な調査研究を通じて、超インフレのいくつかの特徴が明らかとなっている。[2]

※上の例では、「われわれは、とはなった。(略)」が引用部分である。

(2)「出所」をつける。

次の方法で、脚注に出所をつける。

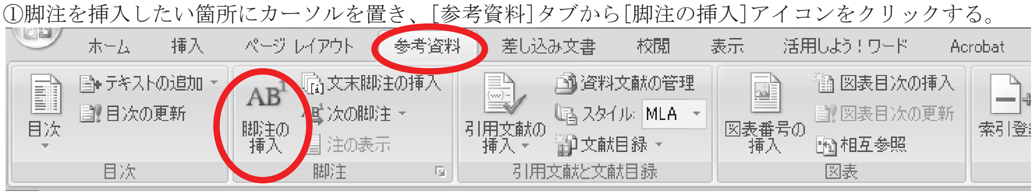
---

[1] 日本経済新聞社編『経済学をつくった巨人たち　先駆者の理論・時代・思想』日本経済新聞社、2003 年、pp.34-35。なお説明の都合上、原典の文章を一部抜粋、修正した。以下、引用部分について同様である。

[2] Samuelson, Paul A. and William D. Nordhaus, *Economics*, Thirteenth Edition, McGraw-Hill Book Company, New York and Other Cities, 1989.(都留重人訳『サムエルソン経済学　上［原書第 13 版］』岩波書店、1992 年、pp.303-304。)

脚注を入力する方法　　　Microsoft Word 2007 の場合

①脚注を挿入したい箇所にカーソルを置き、[参考資料]タブから[脚注の挿入]アイコンをクリックする。



②挿入した箇所に、数字が表れ、同じ数字がページ下部に現れる。

〈挿入した箇所の表記〉　　山下によると1

〈ページ下部の表記〉　　1

③ページ下部の脚注番号の右に、参考、引用する情報の出所を書きこむ。

1 一人の女性が生涯に産む子供の平均的な数。 ←1つ目の脚注

2青山裕二『老人介護問題』、静岡出版社、1999 年、p.8。鈴木大介、望月元『高齢化社会と老人介護』、沼津出版社、2000 年、pp.24-30。　↑2つ目の脚注

Ⅳ　出所（出典）情報の書き方

脚注に出所を書く場合、図表の出所を書く場合、参考文献を書く場合、次のような書き方をする。

(1) 単行書の場合

例. 中谷巌『入門マクロ経済学 第 4 版』日本評論社、2000 年、p.10。

※単行書のタイトルを『 』で示す。

※単一ページを「p.」で、複数ページを「pp.」で示す。

(2) 論文の場合

例. 高木新太郎「93SNA の全体的な特徴」『ECO-FORUM』(統計研究会)、Vol.23、No.2、2005 年、pp.8-13。

※論文のタイトルを「 」で示す。

(3) 単行書（洋書）の場合

例. Samuelson, Paul A. and William D. Nordhaus, Economics, Thirteenth Edition, McGraw-Hill Book Company, New York and Other Cities,1989.

※はじめの著者名を「姓」「名」の順にする。

※単行書のタイトルを斜体で示す。

(4) 論文（英文）の場合

例. Pyatt, Graham and Jeffery I. Round, “Accounting and Fixed Price Multipliers in a Social Accounting Matrix Framework,” The Economic Journal, Vol.89, No.4, 1979, pp.850-873.

※論文のタイトルを“ ”(クォーテーションマーク)で示す。

(5) インターネットの場合
例．総務省統計局「平成 17 年国勢調査の概要」http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2005/gaiyou.htm#1
(参照 2007 年 11 月 21 日)

Ⅴ　レポートに図表を入れる場合の付属情報

レポートに図表を入れる場合、以下の情報をつける。
(1) 図表番号
(2) 図表タイトル
(3) 資料、出所、注
※ データに基づいて自分で図表を作成した場合、用いた資料を明記する。
※ 出所明記の目的は「Ⅱ．出所の書き方」と同様。データに関して注意事項がある場合、また自分でデータを加工した場合、それらを注に明記しなければならない。
※ 他の人が当該図表と同じ資料に基づき、注に書かれたとおりの作業を行った場合、同じ結果を得られなければならない。

Ⅵ　表紙に記入する項目(１ページ目)

(1) 科目　公共情報システム論
(2) 作成日　提出日を記入
(3) 学籍番号・氏名
(4) タイトル　自分でタイトルを考える
「○○事件の調査報告」「個人情報の漏えいとその問題点」「個人情報の保護と管理の課題」などのように、自分でタイトルを考える
【注意】Microsoft Word 2007 で改ページするには、[ページレイアウト]タブの[区切り]にある[改ページ]をクリックします。Ctrl キーを押しながら Enter キーを押しても、改ページできます。

Ⅶ　序論に関する項目（２ページ目）

「１．はじめに」という章を作り、次の内容①～⑦を盛り込んで、文章を作成する。

①「個人情報」」とは何か。(定義や種類に関すること)
②企業がどのような個人情報を収集しているか。(「○○（企業名）の場合、・・・」のように書くと書きやすい。企業の Web サイトのトップページには、「プライバシーポリシー」「個人情報の取り扱い」「個人情報保護指針」などの名前のリンクがある場合が多い。)
③なぜ企業は個人情報を収集するか。
④なぜ個人情報を保護する必要があるのか。
⑤現在の日本で、個人情報の収集・管理・保護に関して、どのような問題点があるか。
⑥自分が今回取り上げる事件（または問題）は何か。
⑦なぜその事件（または問題）を取り上げようと思ったか。
【注意】①、②･･･などの番号は不要。番号を文章に入れず、通常のレポート文章として書くこと。書いたことの裏付けとなる資料については、脚注に記載すること。(詳しくは「脚注を入力する方法」を参考にすること)

Ⅷ　本論に関する項目（「１．はじめに」の後に書く）

「２．調査の方法」「３．結果」「４．考察」という３つの章を作り、次の内容を盛り込むこと。

２．調査の方法

いつ、どのような方法でどんな調査をしたかを書く。

３．結果

次の（１）～（４）の節を作り、それぞれ調査結果を書く。引用する場合は、引用分量が多すぎないこと。なるべく自分で文をまとめること。
（１）事件（または問題）の概要
（２）事件（または問題）が起こった背景、理由、原因
（３）事件（または問題）の影響
（４）事件（または問題）解決のための方策、対策、(事件後の処理、再発防止策等)

４．考察

次の内容①、②を盛り込んで、文章を作成する。

①調査結果からどのようなことがわかったか。

②個人情報の公開、保護、企業・組織の管理についての自分の考え。

【注意】①、②の番号は不要。番号を文章に入れず、通常のレポート文章として書くこと。書いたことの裏付けとなる資料がある場合は、脚注に記載すること。（詳しくは「脚注を入力する方法」を参考にすること）

Ⅸ　結論に関する項目（「４．考察」の後に書く）

「５．おわりに」という章を作る。結論は、全体の内容をざっと述べて確認し、まとめの役割を果たす部分である。この研究の全体を要約し、積み残した問題や今後の課題を書く。

〔書き方例〕

〇のために、〇を行った。その結果、〇は〇であった。〇がわかった。

以上のことから、〇が明らかになった。〇は〇であった。〇は〇と言える。〇は〇と考えられる。

このレポートでは、〇ができなかった。今後〇したい。

Ⅹ　参考文献に関する項目（「５．おわりに」の後に書く）

結論の後に、今回のレポートを書くにあたって読んだ資料、脚注に出所を書いた資料、図表の出所となる資料などの参考文献リストを書く。出所の書き方は、「出所（出典）情報の書き方」に従うこと。著者の姓名のアルファベット順で参考文献を並べて書く。

〔書き方例〕

＜参考文献＞

・　小林康夫・船曳建夫『知の技法 東京大学教養学部「基礎演習」テキスト』東京大学出版会、1994 年。

・　小浜裕久・木村福成『経済論文の作法 増補版 勉強の仕方・レポートの書き方』日本評論社、1999 年。

・　中谷巌『入門マクロ経済学 第 4 版』日本評論社、2000 年。

・　日本経済新聞社編『経済学をつくった巨人たち 先駆者の理論・時代・思想』日本経済新聞社、2003 年。

・　Pyatt, Graham and Jeffery I. Round, “Accounting and Fixed Price Multipliers in a Social Accounting Matrix Framework,” The Economic Journal, Vol.89, No.4, 1979, pp.850-873.

・　Samuelson, Paul A. and William D. Nordhaus, Economics, Thirteenth Edition, McGraw-Hill Book Company, New York and Other Cities,1989.（都留重人訳『サムエルソン経済学 上[原書第 13 版]』岩波書店、1992 年。）

・　高木新太郎「93SNA の全体的な特徴」『ECO-FORUM』（統計研究会）、Vol.23、No.2、2005 年、pp.8-13。